

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第18集

石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ

永井太田北廓遺跡

杉之道遺跡

彦松西遺跡

—市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ—

2015

埼玉県熊谷市教育委員会

石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ
永井太田北廓遺跡
杉之道遺跡
彦松西遺跡

二〇一五
埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第18集

いしはら こふんぐん ふじのこしいせき
石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ

ながい おおたき たぐるわいせき
永井太田北廓遺跡

すぎのどういせき
杉之道遺跡

ひこまつにしいせき
彦松西遺跡

—市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ—

2015

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地中に埋蔵されている多くの遺跡が所在しております。これらの遺跡内ではさまざまな工事が行われておりますが、遺跡を保護・保存することができない場合が多数あります。そうした場合には、発掘調査を実施して記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っております。

本書は、平成23年度に実施した杉之道遺跡、平成25年度に実施した石原古墳群・不二ノ腰遺跡、永井太田北廓遺跡、彦松西遺跡の発掘調査成果について報告するものであります。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました関係者の皆様に厚くお礼申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成27年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、市内遺跡Ⅴ「石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ、永井太田北廓遺跡、杉之道遺跡、彦松西遺跡」の発掘調査報告書である。各遺跡の番号・地番は、下記のとおりである。

石原古墳群・不二ノ腰遺跡	県遺跡№59-025・102	埼玉県熊谷市広瀬字不二ノ腰108番1
永井太田北廓遺跡	県遺跡№61-044	埼玉県熊谷市永井太田字北廓1201番4
杉之道遺跡	県遺跡№61-057	埼玉県熊谷市弥藤吾字杉之道1907番1
彦松西遺跡	県遺跡№61-062	埼玉県熊谷市妻沼中央7-11

- 2 本調査は、すべて個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査であり、市内遺跡発掘調査等事業国庫補助金、県費補助金の交付を受け、熊谷市教育委員会が実施した。

- 3 本事業の組織は、各遺跡の「発掘調査の概要」とおりである。

- 4 各遺跡の発掘調査期間は、下記のとおりである。

石原古墳群・不二ノ腰遺跡	平成25年7月8日～平成25年7月23日
永井太田北廓遺跡	平成25年9月30日～平成25年10月11日
杉之道遺跡	平成23年11月16日～平成23年12月1日
彦松西遺跡	平成25年10月10日～平成25年10月23日

整理・報告書作成期間は、平成26年4月1日から平成27年3月25日までである。

- 5 発掘調査の担当は、石原古墳群・不二ノ腰遺跡及び彦松西遺跡を熊谷市教育委員会吉野 健・塚博隆が、永井太田北廓遺跡を熊谷市教育委員会松田 哲が、杉之道遺跡を熊谷市教育委員会森田安彦がそれぞれ行った。

整理・報告書作成は、石原古墳群・不二ノ腰遺跡及び彦松西遺跡を塚博隆が、永井太田北廓遺跡を松田が、杉之道遺跡を森田が担当した。

- 6 本書の執筆は、各遺跡の調査を整理・報告書作成の担当者が分担し、第1章及び編集を松田が行った。

- 7 写真撮影は、各々の担当者が行った。

- 8 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

- 9 本書の作成にあたり、下記の機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)

埼玉県教育局生涯学習文化財課 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

- 1 本文中、遺構に略記号を使用しているものは、次のとおりである。

SD…溝跡 SK…土坑 P…ピット

- 2 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図…1/60 溝跡・土坑…1/60

- 3 遺構挿図中のスクリーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

=地 山 =焼 土

- 4 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 5 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・陶器…1/3・1/4 土製品・鉄製品・石製品…1/3・1/4

- 6 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・陶器・土製品・鉄製品・石製品断面：白抜き 須恵器断面：黒塗り

灰釉陶器： 瓦： 黒色処理：

- 7 遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

- 8 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子

F…白色針状物質 G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石

L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 9 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 10 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 遺跡の立地と環境	1
II 石原古墳群・不二ノ腰遺跡の調査	9
1 発掘調査の概要	9
2 検出された遺構と遺物	13
3 調査のまとめ	16
III 永井太田北廓遺跡の調査	19
1 発掘調査の概要	19
2 検出された遺構と遺物	20
3 調査のまとめ	31
IV 杉之道遺跡の調査	35
1 発掘調査の概要	35
2 検出された遺構と遺物	37
3 調査のまとめ	42
V 彦松西遺跡の調査	45
1 発掘調査の概要	45
2 検出された遺構と遺物	48
3 調査のまとめ	52

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	1
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡調査地点位置図	11
第4図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡調査区全測図	12
第5図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第1・2号溝跡	14
第6図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第1・2号土坑	14
第7図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡出土遺物	15
第8図 永井太田北廓遺跡調査地点位置図	20

第9図	永井太田北廓遺跡調査区全測図	21
第10図	永井太田北廓遺跡第1～3号溝跡	23
第11図	永井太田北廓遺跡第4号溝跡・第1～4号柵列・第1号土坑	25
第12図	永井太田北廓遺跡出土遺物(1)	28
第13図	永井太田北廓遺跡出土遺物(2)	29
第14図	杉之道遺跡調査地点位置図	38
第15図	杉之道遺跡調査区全測図・基本土層	39
第16図	杉之道遺跡溝跡・噴砂断面図・出土遺物	41
第17図	彦松西遺跡調査地点位置図	46
第18図	彦松西遺跡調査区全測図	47
第19図	彦松西遺跡第1号溝跡	49
第20図	彦松西遺跡第1号溝跡出土遺物・表採遺物	50
第21図	彦松西遺跡第1～5号ピット	51

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	石原古墳群・不二ノ腰遺跡出土遺物観察表	15
第3表	永井太田北廓遺跡出土遺物観察表	30
第4表	彦松西遺跡出土遺物観察表	50

図版目次

図版1	石原古墳群・不二ノ腰遺跡調査区全景（南から） 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第1号溝跡礎堆積状況（西から） 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第2号溝跡（西から）
図版2	石原古墳群・不二ノ腰遺跡第1・2号土坑（西から） 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第2号土坑礎検出状況（北から） 石原古墳群・不二ノ腰遺跡作業風景
図版3	永井太田北廓遺跡調査区全景（南から） 永井太田北廓遺跡調査区全景（南東から）
図版4	永井太田北廓遺跡第1号溝跡 永井太田北廓遺跡第2号溝跡 永井太田北廓遺跡第3号溝跡 永井太田北廓遺跡第4号溝跡 永井太田北廓遺跡第4号溝跡焼土検出状況

永井太田北廓遺跡第1～3号櫓列跡

永井太田北廓遺跡第4号櫓列跡

永井太田北廓遺跡第1号土坑

図版5 永井太田北廓遺跡第3号溝跡 第12図5・5内面

永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図9・15・15内面・16・16内面・27・29・32・34

図版6 永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13図37・38・42・43・45・48・49

永井太田北廓遺跡第1号溝跡 第12図2

永井太田北廓遺跡第3号溝跡 第12図8

図版7 彦松西遺跡・杉之道遺跡航空写真（平成16年5月撮影）

杉之道遺跡第1・2号溝跡（南より）

図版8 杉之道遺跡基本土層

杉之道遺跡噴砂確認状況

杉之道遺跡噴砂（南面）

杉之道遺跡噴砂（北面）

杉之道遺跡噴砂確認坑

杉之道遺跡噴砂（北面）

杉之道遺跡第1・2号溝跡出土遺物

杉之道遺跡第1号溝跡出土遺物

図版9 彦松西遺跡調査区全景（東から）

彦松西遺跡第1号溝跡（北から）

彦松西遺跡第1号溝跡AA'（南から）

彦松西遺跡ビット全景（西から）

I 遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成の大合併による二度の合併（平成17年に妻沼町及び大里町、平成19年に江南町）を経て県北初の20万都市となり、平成21年4月から「特例市」として現在に至っている。

熊谷市は、北側の群馬県との境を利根川が、南側は旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の2大川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。

櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約2kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向かって緩やかに下る。荒川に面した櫛引台地南東端には、独立丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mを測る。櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や微高地、後背湿地が発達している。

今回報告する遺跡は、石原古墳群・不二ノ腰遺跡、永井太田北廓遺跡、杉之道遺跡、彦松西遺跡の4遺跡1古墳群である。石原古墳群・不二ノ腰遺跡は、熊谷市ほぼ中央の石原及び広瀬地区に所在する。標高34m前後の新荒川扇状地上に立地し、荒川とは南へ約1kmの距離にある。永井太田北廓遺跡、杉之道遺跡、彦松西遺跡の3遺跡は、旧妻沼町域に所在する。旧妻沼町域は、利根川及びその支流により形成された自然堤防とその後背地からなる低地帯（妻沼低地）が広がっており、西から東へ緩やかに傾斜する。3遺跡はすべて微高地上に立地している。永井太田北廓遺跡は、市北西部の永井太田地区に所在する。標高31m前後で利根川とは約1kmの距離にある。杉之道遺跡と彦松西遺跡は、ともに市北部に位置する。杉之道遺跡は弥藤吾地区に所在する。標高28m前後で利根川とは約2kmの距離にある。彦松西遺跡は、妻沼中央地区に所在する。標高29m前後で利根川とは約1.5kmの距離にある。



第1図 埼玉県地形図

次に周辺の歴史的環境について概観する（第2図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市西部及び深谷市域に多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市龍原真遺跡（73）から出土した黒曜石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期は、次第に遺跡数が増え始め、台地上では三ヶ尻遺跡（85）で集落跡が確認され、低地上では遺構は確認されていないが、西城切通遺跡（40）で関山式土器、寺東遺跡（62）で諸磯式土器が検出されている。中期になると遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曾利E式期の遺跡が多い。前期と異なり、台地以外に低地上にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛引台地北東端及び台地下の低地上に集中する。後期になると遺跡数は減少するが、さらに低地へ進出しはじめ、西城切通遺跡、場邊ヶ谷戸遺跡（41）など櫛引台地から離れた低地上でも遺跡が認められるようになる。晩期は遺跡数がさらに減少する。地図中には示せなかったが、市東部では低地上に立地する諏訪木遺跡や中西遺跡で集落跡が確認されている。この他では櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではないが、次代へのつながりがみとれる資料である。

弥生時代は、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期前半の遺跡は、櫛引台地北東端及び台地下の低地上に集中するが、検出されたのは集落跡ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（48）では、前期末から中期前半までの再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市飯塚遺跡（12）、飯塚南遺跡（20）、深谷市上敷免遺跡などで再葬墓が検出されており、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の達賀川式土器の壺胴部片も出土している。

中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市東部の低地上に集落跡が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（地図未掲載）やその墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（地図未掲載）などをはじめ、本格的に展開されるようになる。この他にも北島遺跡や前中西遺跡などで大規模集落が展開されるようになるが、市北部及び西部では確認例が少なく、深谷市明戸東遺跡（地図未掲載）など後期の遺跡がいくつか点在するのみである。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。一本木前遺跡（64）では、約100軒もの膨大な数の住居跡の他に4基の方形周溝墓が確認されており、2号方形周溝墓の主体部からはヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯などが検出されている。なお住居跡群と方形周溝墓群には若干の時期差があり、前者が古く、後者が新しいことが判明している。この他にも古墳時代前期は確認例がたくさんあるが、遺跡は主に利根川流域沿いに分布する傾向にある。中期は確認例が少なく、市東部では集落跡が確認されているが、市北部及び西部では市指定史跡である横塚山古墳（F：奈良古墳群）があるのみである。B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部削平されている。後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は大規模になり、低地上にも多数出現する。そして、これらの集落は奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地や低地上に築造されている。旧妻沼町域では、摩多利神社古墳（A）や王子古墳（C）など単独のものもあるが、おそらく周辺に未確認の古墳が群在すると思われる。古墳

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	熊谷市		63	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
1	観音堂瓦窓跡	平安、中世	64	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
2	永井太田北高遺跡	古墳後、奈良・平安、近世	65	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
3	永井太田西高遺跡	古墳前、奈良・平安	66	西通遺跡	古墳後
4	鎌子尾遺跡	古墳後、奈良	67	東通遺跡	古墳後
5	緑川遺跡	古墳後、奈良・平安	68	横塚遺跡	古墳前、平安
6	大我井遺跡	古墳前、奈良・平安	69	土用ヶ谷戸遺跡	奈良・平安
7	池ノ上遺跡	古墳後	70	奈良氏館跡	平安末～中世
8	飯塚北遺跡	古墳後、奈良・平安	71	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
9	本新田遺跡	古墳後	72	別府三丁目遺跡	奈良・平安
10	前新田遺跡	古墳後、奈良・平安	73	龍原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中・近世
11	藤屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安	74	在家遺跡	古墳後、奈良・平安
12	飯塚遺跡	弥生中	75	五反畑遺跡	中世
13	年代遺跡	古墳後	76	玉井陣屋跡	平安末～中世
14	彦松西遺跡	古墳後、奈良	77	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
15	彦松遺跡	古墳後、奈良・平安	78	水押下遺跡	古墳後
16	彦松東遺跡	古墳前、奈良・平安	79	稲荷木上遺跡	古墳後
17	中西原遺跡	奈良・平安	80	下河原中遺跡	奈良・平安
18	踏切遺跡	平安	81	下河原上遺跡	近世
19	八幡木遺跡	古墳後、奈良	82	本代遺跡	古墳後、近世
20	飯塚南遺跡	縄文後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	83	東浦遺跡	古墳前、平安
21	羽黒遺跡	古墳後	84	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	道ヶ谷ヶ谷里遺跡	奈良	85	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世
23	道ヶ谷戸遺跡	古墳後、平安	86	樋の上遺跡	縄文前～後、古墳後、奈良・平安、中・近世
24	中浦遺跡	奈良・平安	87	若松遺跡	中・近世
25	弥生吉野田遺跡	古墳前、奈良・平安	88	黒沢館跡	中世
26	一本杉遺跡	古墳後、中・近世	89	東遺跡	平安、中世
27	下宿遺跡	古墳後	90	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
28	杉之重遺跡	古墳後、奈良・平安	91	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
29	王子西遺跡	古墳後、奈良・平安	92	天神前遺跡	古墳中・後、中世
30	堀ノ内遺跡	縄文後、古墳後	93	兵部裏屋敷跡	中世
31	釜ノ上遺跡	奈良	94	田角遺跡	平安
32	長井庵遺跡	古墳後	95	御蔵場跡	近世
33	出口北遺跡	古墳後	96	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世
34	出口南遺跡	古墳後	97	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世
35	東郷愛遺跡	奈良・平安	98	肥塚館跡	中世
36	西郷愛遺跡	古墳後、奈良・平安	99	出口下遺跡	古墳後
37	高林遺跡	古墳後、奈良・平安	100	八幡山遺跡	古墳
38	実盛館	平安		深谷市	
39	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	101	砂田遺跡	古墳中・後、平安、中世
40	西域切通遺跡	縄文後	102	柳町遺跡	古墳中・後、奈良・平安、中世
41	場邊ヶ谷戸遺跡	縄文後	103	城北遺跡	古墳後、平安
42	鷺ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	104	居立遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
43	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	105	前遺跡	古墳前、奈良・平安、中・近世
44	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	106	原遺跡	縄文後～晩、古墳後
45	西城城跡	平安	107	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安
46	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	108	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良・平安
47	根路遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	109	幡羅遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
48	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良・平安、近世	110	下郷遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
49	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後		古墳群	
50	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	A	摩多利神社古墳	古墳後
51	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	B	飯塚古墳群	古墳後
52	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	C	王子古墳	古墳後
53	西別府遺跡	古墳後、奈良・平安	D	上江袋古墳群	古墳後
54	西別府隆寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	E	乙鶴森古墳群	古墳後
55	西別府館跡	平安末～中世	F	奈良古墳群	古墳中期後～末
56	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	G	別府古墳群	古墳後
57	別府条里遺跡	奈良・平安	H	在家古墳群	古墳末
58	大竹遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	I	龍原裏古墳群	古墳末
59	埋鳥遺跡	縄文中、奈良・平安	J	玉井古墳群	古墳後
60	別府城跡	平安、中世	K	原島古墳群	古墳後
61	別府氏館跡	平安末～中世	L	石原古墳群	古墳後
62	寺東遺跡	縄文前～後	M	肥塚古墳群	古墳後～末

群は概ね6世紀から7世紀末ないし8世紀初頭にかけて築造されたが、埴輪を持たない末期の古墳群に在家古墳群(H)、龍原真古墳群(I)などがある。市内の古墳群で特筆すべきは、龍原真古墳群で墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことなどが挙げられ、後述する深谷市幡羅遺跡(109)や熊谷市西別府祭祀遺跡(51)、西別府廃寺(54)などの郡家や郡家に関連すると思われる遺跡と時期的・地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群と言える。

律令体制の始まる奈良・平安時代において本地域周辺一帯は、武蔵国幡羅郡に属する。上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北部から西部にかけてと深谷市東部を含む一帯が該当すると考えられている。櫛引台地北東端に立地する深谷市幡羅遺跡では、平成13年度に郡家の正倉と推定される総柱掘立建物跡が確認されて以降、幡羅郡家推定地として確認調査が実施されており、これまでに多数の大型掘立建物跡や区画大溝などが確認されている。幡羅遺跡の東側に所在する熊谷市西別府廃寺は、8世紀初頭に創建された県内でも古い寺院であり、平成2・4年度に実施された発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、区画溝など検出されている。出土した瓦には9世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺北西の櫛引台地縁部に位置する。現在は湯殿神社となっているが、昭和38年度及び平成4年度に実施した発掘調査では、神社裏の湧水堀から土師器、須恵器の他に人形、馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板形などの滑石製模造品が多数検出されており、これらは水辺の祭祀に用いられたと考えられている。平成4年度の発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群が多数検出されており、祭祀が平安時代の終わり頃まで存続していたことが確認されている。熊谷市西別府廃寺及び西別府祭祀遺跡、そして深谷市幡羅遺跡は、時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白である。郡庁は未だ確認できていないが、この地域一帯が当時の中心地であったことが徐々に明らかになってきている。

集落は、前述のとおり、古墳時代後期以降継続する遺跡が多く、かつ規模の大きいものが多い。集落以外では、道ヶ谷戸条里遺跡(22)、別府条里遺跡(57)など後背湿地を利用した生産遺跡が分布するが、詳細については不明と言わざるを得ない。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。市北部では実盛館(38)、西城城跡(45)、東城城跡(地図未掲載)、市西部では西別府館跡(55)、別府氏館跡(61)、奈良氏館跡(70)、市中央付近では兵部裏屋敷跡(93)などがあるが、その実態は不明なものが多い。市西部の東別府地区にある別府城跡(60)では、現在も土塁と空堀の一部残っている。三ヶ尻地区では中世の遺構・遺物が比較的多く確認されている。中でも黒沢館跡(88)は発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口などが検出され、渡辺崋山が記した文献『訪照録(ほうへいろく)』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。館跡以外では、市北部の妻沼地区に所在する大我井遺跡(6)では、4基の経塚が著名であり、最古の経筒には「久安」(1145～1151年)の紀年銘が残っている。近年、水口氏が再検討を加えており、中世墓と埋経遺構の複合遺跡と推測している(水口2006)。同じく妻沼地区の観音堂瓦窯跡(1)は、低地に築かれた有床式平窯であり、縄目・布目の平瓦が検出されているが、供給先も含め不明な点が多い。また妻沼地区に所在する国宝「聖天山」、国指定重要文化財「貴惣門」を有する歓喜院長楽寺

は、治承三年（1179年）に斎藤別当実盛公による白髪神社の改修・合祀を端緒とし、建久八年（1197年）に良心僧都によって、別当聖天山歙喜院長楽寺として建立されたものとされている。

中世段階については館跡などを中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様で市内ではいくつかの確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

引用・参考文献

- 熊谷市遺跡調査会 1977 『横塚山古墳』
- 熊谷市教育委員会 1985 『三尻遺跡群 黒沢館跡・樋ノ上遺跡』 昭和59年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 1988 『三尻遺跡群 社裏南遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡』 昭和63年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 1992 『西別府庵寺』 平成3年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 1994 『西別府庵寺（第二次）』 平成5年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 1999 『横間栗遺跡』 平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 2000 『寺東遺跡・別府氏館跡』 平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 2000 『西別府祭祀遺跡』 平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 2003 『一本木前遺跡Ⅳ』 平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 2004 『籠原裏遺跡』 平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 2005 『籠原裏古墳群』 平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 2009 『西別府祭祀遺跡Ⅱ』 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 2010 『西城切通遺跡』 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 埼玉県遺跡調査会 1971 『横塚山古墳』 埼玉県遺跡調査会報告書第9集
- 埼玉県教育委員会 1984 『池上・池守』
- 1988 『埼玉の中世城館跡』
- 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団 1983 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
- 1984 『三ヶ尻林(2)・台』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第34集
- 1989 『新田裏・明戸東・原遺跡』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 1991 『小敷田遺跡』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 1993 『上敷免遺跡』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 2005 『飯塚北遺跡Ⅰ』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第306集
- 2005 『飯塚古墳群Ⅰ』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第317集
- 2006 『飯塚北Ⅱ/飯塚古墳群Ⅱ』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第321集
- 深谷市教育委員会 2010 『補遺遺跡Ⅵ』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第111集
- 水口由紀子 2006 「埼玉県熊谷市妻沼経塚の再検討」『埼玉の考古学Ⅱ』 埼玉考古学会
- 妻沼町 1977 『妻沼町誌』 妻沼町誌編纂委員会
- 妻沼町教育委員会 1981 『妻沼町西南遺跡群Ⅰ—道ヶ谷戸条里・道ヶ谷戸・飯塚南—』 妻沼町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 1982 『大我井経塚』 資料集第二号

石原古墳群・不二ノ腰遺跡



Ⅱ 石原古墳群・不二ノ腰遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

平成25年5月27日付けで、事業者から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。開発の内容は面積192㎡の個人住宅建設であった。

熊谷市教育委員会は届出を受けて、平成25年6月13日に試掘調査を実施した。その結果、開発予定地の西側から奈良時代～平安時代の土師器・須恵器片及び溝跡が検出され、埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を事業者に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、熊谷市教育委員会から、平成25年7月3日付熊教社第1208号で、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成25年7月8日から開始された。

なお、埼玉県教育委員会から、事業者あてに平成25年6月25日付教生文第5-238号で発掘調査実施の指示通知があった。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成25年7月8日から平成25年7月23日にかけて行われた。調査面積は、個人住宅建設面積192㎡のうち、遺構・遺物が確認され破壊を受ける21.20㎡であった。

平成25年7月8日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、7月9日から遺構精査作業を行った。その際、溝跡、土坑などが確認され、順次遺構の調査に着手した。調査区の大部分の遺構は検出が比較的容易であったが、調査区の一部では小礫が地山と想定される箇所があり、遺構の検出および作業自体に困難を要した。平成25年7月23日、調査のすべてを終了した。

整理・報告書作成作業は、平成26年5月1日から遺物の洗浄・注記・復元を行った。9月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。10月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、1月中旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月25日に本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成25年度

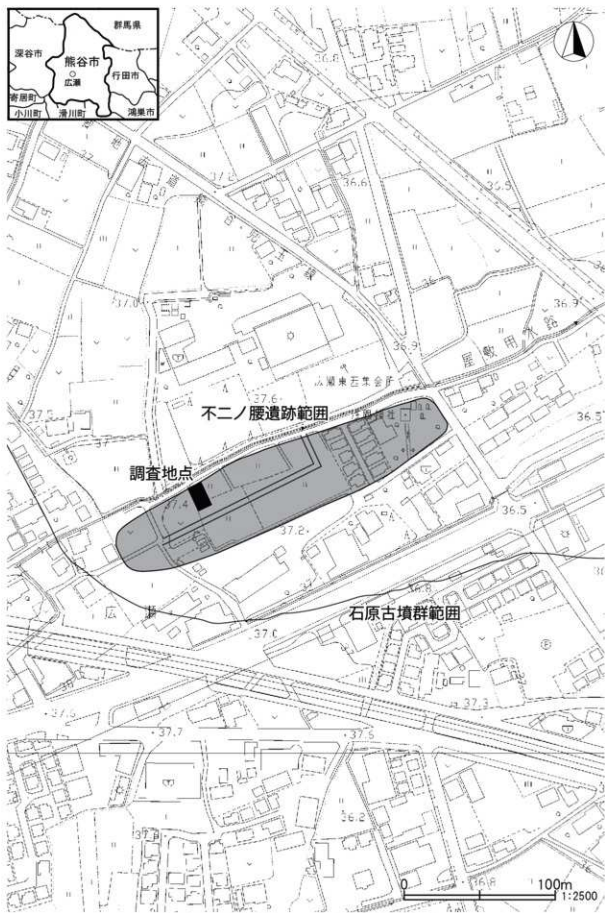
教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 勝
社会教育課長	岩上 精純

社会教育課文化財保護・市史編纂担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦
主幹	吉野 健
文化財保護係主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主任	藏持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
発掘調査員	原野 真祐

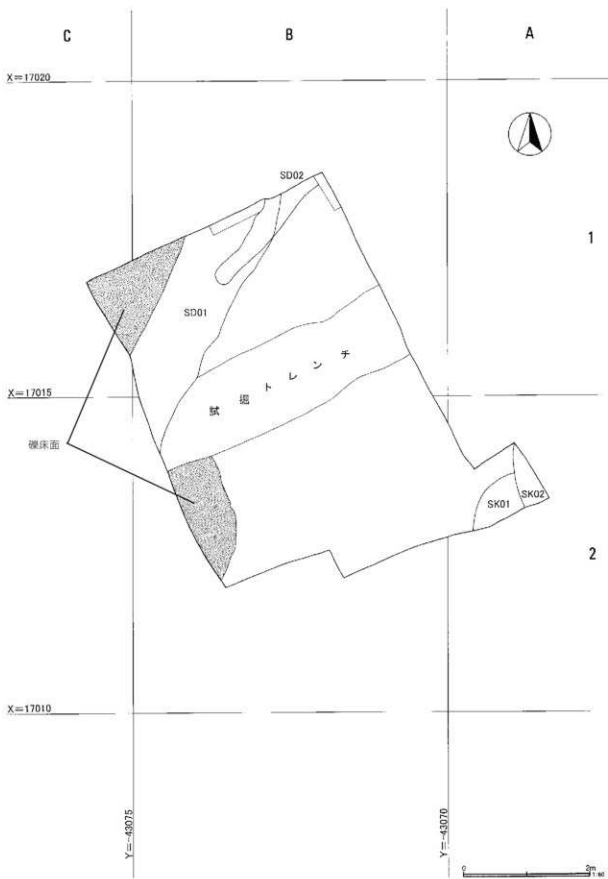
イ 整理・報告書作成事業

平成26年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護・市史編纂担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健
社会教育課文化財保護係主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主査	小島 洋一
主任	藏持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
発掘調査員	原野 真祐



第3図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡調査地点位置図



第4図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡調査区全測図

2 検出された遺構と遺物

(1) 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北東隅をA-1として西へA・B・C・・・、南へ1・2・3・・・とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以西もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。なお、座標は世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。表土剥ぎ後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごとに一括して慎重に取り上げた。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

(2) 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、北側に溝跡2条、南東側に土坑が2基検出されている。

遺物の大半は土坑から出土しており、主に奈良～平安時代の土師器、須恵器等が多く、コンテナ1箱分にも満たないほどの出土量であった。

(1) 溝跡

溝跡は、総じて2条検出した。

第2号溝跡が第1号溝跡を掘り込む形で、調査区の北側で検出された。

以下溝跡ごとに詳細を記載する。

第1号溝跡（第5図、第2表）

B-1・2グリッドから検出した。第2号溝跡と重複関係にあり、第2号溝跡が第1号溝跡を掘り込む形で検出された。全容は確認されず、一部は調査区域外であった。

規模は、検出長5.50m、最大幅1.05～0.98m、深さは0.39～0.45mであった。本溝跡は、北東から南東方向に延びており、底部には多くの礫（川原石）が堆積していた。礫は土層断面から見て、大体0.20m位から堆積が始まっており、特に底部の土層の覆土には一部砂質が多く混じる様相であった。

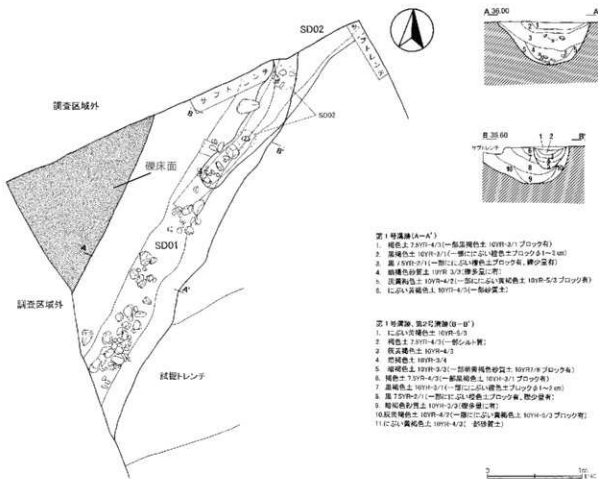
本溝跡は、土層断面から、自然堆積によって形成されたことが考えられる。

出土遺物は、底面から図示可能な須恵器壺の破片が1点検出され、それ以外に土師器、須恵器の細片が多く検出されたが、それらは図示可能な遺物ではなかった。流れ込みの可能性が高いが出土した遺物から大体に9世紀後半から10世紀中ごろだと考えられる。

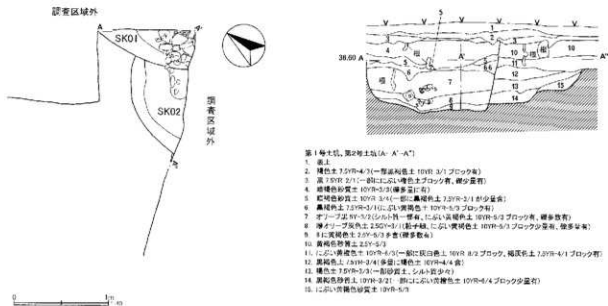
第2号溝跡（第5図）

B-2グリッドから検出した。第1号溝跡と重複関係にあり、第2号溝跡が第1号溝跡を掘り込む形で検出された。大半は調査区域外であるが、溝の終点が確認できた。

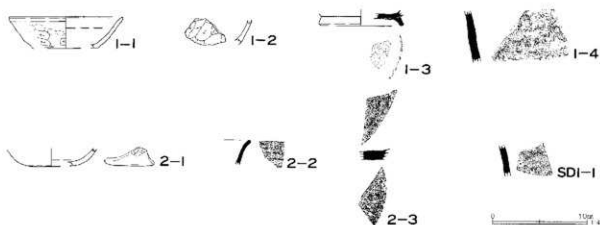
規模は、検出長1.69m、幅0.38～0.25m、深さは0.19～0.24mであった。第1号溝跡とほぼ同じ向きの北東から南東方向に延びていることが想定できる。本溝跡でも礫が床面から検出され、数点の小礫が確認できた。



第5図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第1・2号溝跡



第6図 石原古墳群・不二ノ腰遺跡第1・2号土坑



第7図 石原古墳群・不二ノ腰道跡出土遺物

第2表 石原古墳群・不二ノ腰道跡出土遺物観察表

遺構	番号	器種	法量 (cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
SD1	1	須恵器 壺	—		A、B、L、 N	灰N-4/	普通	破片	末野産
SK01	1	土師器 杯	口径(12.0) 器高3.3	外面胴部ナデ痕	A、B、E	にぶい橙7.5YR-7/4	普通	10%	
SK01	2	土師器 壺	—		A、B、E、 I、N	明赤褐5YR-5/6	普通	破片	
SK01	3	須恵器 (高台杯) 碗	口径(—) 残存高1.7 残存底径9.0	台部接着痕有 燃焼温度低い 底部ヘラナデ	A、E、I、 K、L	にぶい黄2.5Y-6/3	不良	台部片	末野産
SK01	4	須恵器 壺	—		A、B、F、 L、N	褐灰10YR-6/1	普通	破片	南比企産?
SK02	1	土師器 杯	口径(—) 残存高1.9 残存底径5.5		A、B、E、 K、M	橙5YR-6/6	普通	破片	
SK02	2	須恵器 杯	—	外面ナデ痕有	A、B、L、 M、N	灰N-6/	良好	口縁部片	末野産
SK02	3	須恵器 壺	—	底部ヘラケズリ痕有	A、B、F、 L、N	灰白N-7/	普通	底部片	末野産

出土遺物は土師器壺片が数点検出されたが図示可能な遺物ではなかった。なお、時期は判断可能な遺物が検出されなかったため、不明だが、第1号溝との重複関係から10世紀以降と考えられる。

(2) 土坑

土坑は、総じて2基検出した。それらはすべて調査区域外に接しており、一部のみしか確認できなかった。

出土遺物は、全体的に少ないが、本調査での遺物の検出はこの土坑からが大半であった。

時期については、その多くが概ね平安時代(9世紀代)に該当する。

以下、各土坑の詳細を記載する。

第1号土坑(第6図、第2表)

A-2グリッドから検出した。第2号土坑と重複関係にあり、第2号土坑を切っていた。

大半は調査区域外であるが平面プランは楕円形を呈すると推定され、規模は検出長軸1.02m、検出短軸0.40m、深さ0.74mであった。底部付近の土層にいたっては、10cm～25cm大の川原石が多数出土した。当初は礫敷としての様相を考えたが、不規則に堆積している点と、床面は一様にしまりが無い点、さら

には大半が調査区域外まで広がっているため全容は不明である。

出土遺物は、図示可能な土師器杯・甕破片、末野産の須恵器（高台付）碗の台部と、南比企産だと思われる甕片が出土した。それ以外にも土師器・須恵器の細片が出土したが、図示可能な遺物ではなかった。時期は9世紀後半と推定される。

第2号土坑（第6図、第2表）

A-2グリッドから検出した。第1号土坑と重複関係にあり、第1号土坑に切られていた。

大半が調査区域外であるため、平面プランは楕円形と推測され、規模は検出長軸0.92m、検出短軸0.59m、深さ0.39mであった。本土坑の落ち込みは2段階で、始めは緩やかに、次に鋭角に底部に向かって落ち込んでいた。

出土遺物は図示可能な土師器杯、末野産の須恵器杯片・甕片がそれぞれ一点ずつ出土したが、それ以外は図示可能な遺物ではなかった。時期は9世紀初頭と推定される。

3 調査のまとめ

今回の調査は、2000年に行った発掘調査個所のすぐ北側であったことから、発掘当初から地山に礫が混ざって堆積しているだろうことは想定されていた。今回は住居跡が検出されなかったが、当時としては開発するのに苦勞を強いられるこのような土地に、生活圏があったことはどのような理由があったのか興味を得るものである。

また、本調査区の北側で検出された溝跡では床面からの礫や幾分か砂質土が確認されたことから、流路跡だと想定される。しかし、調査面積が狭小であったため、判断材料に乏しい。今回の調査は、昨年度からこの地域周辺での住宅建設等の開発行為が進んでいるため、今後の発掘調査での情報の蓄積に期待したい。

引用・参考文献

熊谷市 1963 『熊谷市史』前編

熊谷市石原古墳群調査会 2008 『石原古墳群第2号墳』

熊谷市遺跡調査会 2012 『樋の上遺跡』

熊谷市教育委員会 2000 『不二ノ腰遺跡』

2003 『三ヶ尻遺跡Ⅲ』

2006 『拾六間後遺跡』

2012 『西別府遺跡Ⅰ 西別府廃寺Ⅲ』—西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅱ—

2013 『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡総括報告書Ⅰ』—西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅲ—

熊谷市不二ノ腰遺跡調査会 2014 『不二ノ腰遺跡Ⅱ』

永井太田北廓遺跡



Ⅲ 永井太田北廓遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経緯

平成25年8月2日、事業者より熊谷市永井太田字北廓1201番4地内における個人専用住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会では工事予定箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№61-044 永井太田北廓遺跡）に該当することから遺跡の詳細を把握するため、平成25年9月2日に試掘調査を実施した結果、現地表面下90cmで奈良・平安時代の遺構・遺物が確認された。

住宅建築は、基礎工法に地盤改良工事が予定されていたことから、熊谷市教育委員会は事業者へ計画している工事内容では遺跡が破壊されてしまうため、事前に発掘調査を実施する必要がある旨を伝え、保存策などについて協議を行った。しかし、工事内容の変更は不可能であるとの結論に達したことから工事により破壊される住宅建築箇所のみ記録保存の措置を講ずることとなった。この結果を基に平成25年10月11日付け熊教社発第1460号で埼玉県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘の届出を送付し、事業者あてに平成25年10月18日付け教生文第4-860号で発掘調査実施の指示通知がなされた。

発掘調査の通知は、熊谷市教育委員会から平成25年10月1日付け熊教社発第1441号で埼玉県教育委員会教育長あてへ送付した。なお、この発掘調査は熊谷市が平成25年度市内遺跡発掘調査等事業補助金の交付を受けて実施したものであり、国が1/2、埼玉県が1/4、熊谷市が1/4の費用負担を行った。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成25年9月30日から10月11日まで実施した。調査面積は79㎡である。調査は、まず9月30日に重機による表土掘削、10月1日に器材搬入を行い、10月2日から作業員を導入し、遺構確認、遺構の発掘、土層断面図の作成作業を行った。そして、10月10日に平面図作成と写真撮影、10月11日に重機による調査箇所の埋め戻しや器材撤収を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、平成26年4月から平成27年3月まで実施した。4月から6月までは、遺物の洗浄、注記、接合、復元などの作業を行い、併行して遺構の図面整理を行った。7月から10月までは、遺物の実測・拓本、遺構・遺物のデジタルトレースを行い、11月に遺構・遺物の版組を作成した。12月から翌年1月中旬までは、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行い、他の遺跡を含めた報告書の編集を行った。そして、印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行って3月下旬に報告書を刊行した。

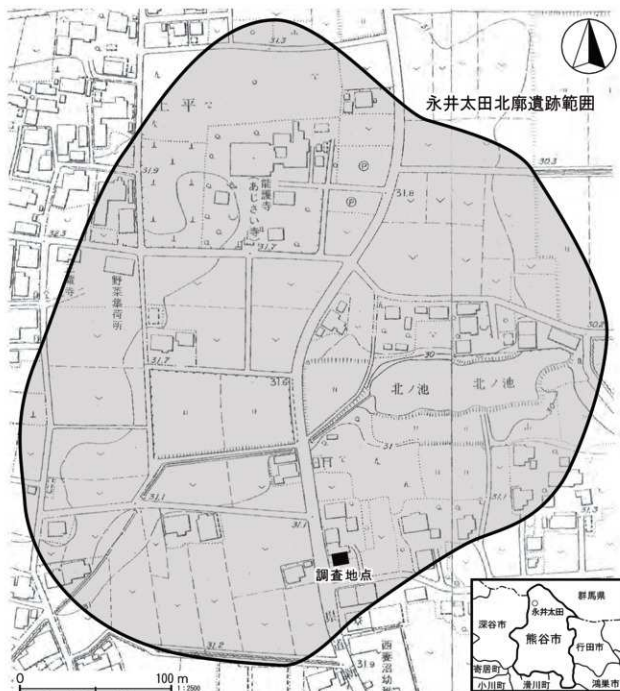
(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

発掘調査は平成25年度に、整理・報告書作成は平成26年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第Ⅱ章石原古墳群・不二ノ腰遺跡と同一であるため記述を省略する。別途石原古墳群・不二ノ腰遺跡を参照されたい。

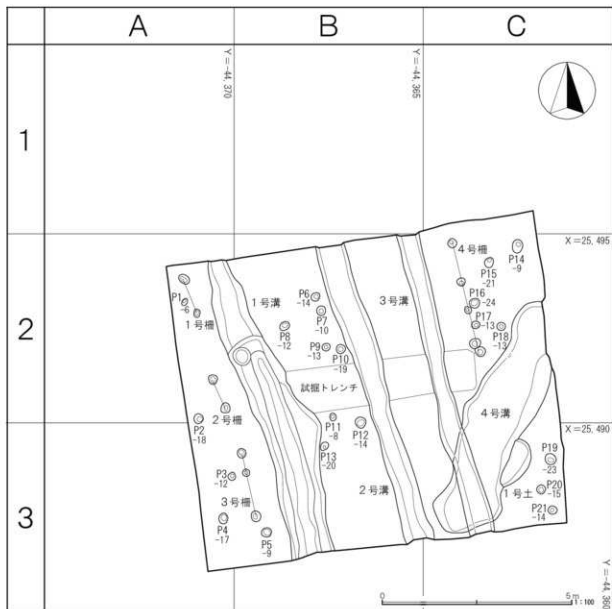
2 検出された遺構と遺物

永井太田北廓遺跡における発掘調査は、今回が初となる。遺跡は東西約360m、南北420mの範囲に広がっており、報告する地点は遺跡範囲南端中央付近にあたる（第8図）。検出された遺構は、溝跡4条、柵列跡4列、土坑1基、ピット21基である（第9図）。調査面積は79㎡と小さいが、これらの遺構は調査区全面から検出された。現地表面から遺構確認面までの深さは、1m前後であった。

溝跡は、4条検出された。第1～3号はほぼ南北方向、第4号のみ北東から南西方向に走る。遺物は、第1～3号から平安時代の須恵器、土師器、灰軸陶器、土鍾、鉄製品が、第4号からは奈良時代の須恵器、土師器、平瓦が出土した。特に第4号では下層から多数の遺物がまとめて出土した。



第8図 永井太田北廓遺跡調査地点位置図



第9図 永井太田北原遺跡調査区全測図

柵列跡は、4列検出された。すべて第1～3号溝跡に併行して分布しており、第1～3号は第1号溝跡西側、第4号のみ第3号溝跡東側に位置する。ただし第1～3号柵列跡については、軸が微妙に合わないことから個別に扱ったが、同一遺構とみなして良いものと思われる。出土遺物は図示不可能であったが、第4号からのみ土師器甕の破片が出土した。

土坑は、1基のみ検出された。大半を第4号溝跡に切られているため、残存状態が悪いが、平面形は円形ないし楕円形を呈すると思われる。出土遺物がなく、時期の特定は困難と言わざるを得ない。

ピットは、計21基検出された。調査区はほぼ全面に分布するが、主に東、中央、西側の3か所に分けられる。規則的に並ぶものは柵列跡とみなしたが、その他については単独ピットとして扱った。遺物は、ピット6基から検出されたが、P14出土の陶器以外は図示不可能であった。時期はP14以外、古代のものが多くと思われる。

遺構外出土遺物は、奈良・平安時代の須恵器甕の破片2点のみである。

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第10図)

A・B-2・3グリッドに位置する。東側にほぼ等間隔で第2・3号溝跡が南北方向に併走し、西側は第1～3号柵列跡が隣接して分布する。

ほぼ南北方向に走り、両端はともに調査区外に延びる。検出された長さは8.12m、幅はバラツキがみられ、北側は0.5～1m、南側は1～1.5mを測る。確認面からの深さは、北側が0.08m程であるが、A・B-2グリッド境付近から南側はさらに深く掘りこまれており、最深部で0.42m程を測る。またA・B-2グリッド境の一段深い箇所では、径0.48m前後のビットが1基確認された。底面からの深さは0.15mを測る。断面形は浅い北側が船底状を呈し、南側は東西にテラス状の段を持つ。覆土は、浅い北側が1層(9層)、深い南側は3層(10・11・12層)確認された。覆土はビットも含めほぼすべての層に火山灰と思われる白色粒を含んでいた。自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、須恵器高台付椀(第12図1)と鉄製品刀子(第12図2)のみである。この他に図示不可能な遺物として酸化塩焼成の須恵器高台付椀や9世紀代の土師器杯の破片も検出された。

1は須恵器高台付椀の口縁部から体部までの部位。口縁部は内湾しながら立ち上がる。推定径であるが、口径が14.8cmを測ることから高台付椀と判断した。内外面ともに回転ナズ調整が施されている。南比企産。2は刀子の柄部と思われる鉄製品。刃部や基部は欠損している。

本溝跡の時期は、9世紀中葉から後半にかけての段階と思われる。

第2号溝跡 (第10図)

B・C-2・3グリッドに位置する。東側に第3号溝跡、西側に第1号溝跡がほぼ等間隔で南北方向に併走する。本溝跡と第1号溝跡間には単独ビットが不規則に分布する。

第1号溝跡と同じくほぼ南北方向に走り、両端はともに調査区外に延びる。検出された長さは8.06m、幅はややバラツキがあるが、概ね0.7m前後を測る。確認面からの深さは、北側が0.15m、南側が0.37m程を測り、北から南へ下る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は浅い北側で1層(13層)、深い南側で3層(10・11・14層)確認され、第1号溝跡と同じくすべての層に火山灰と思われる白色粒を含んでいた。自然堆積と思われる。

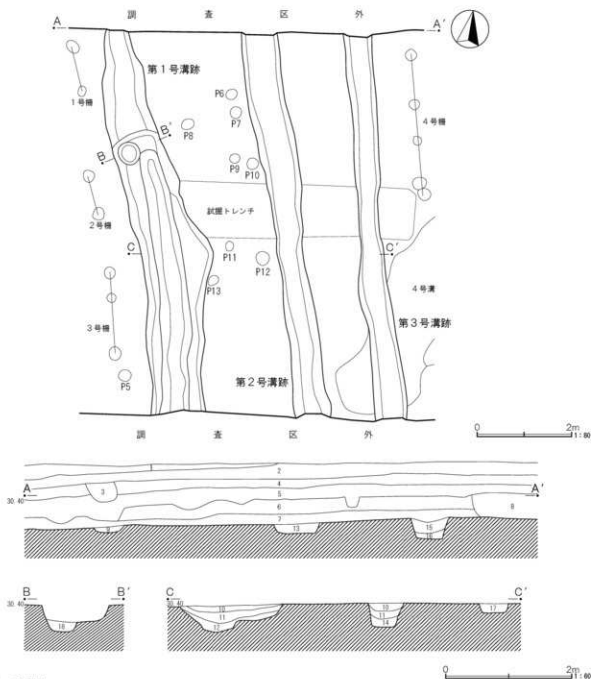
出土遺物は、灰釉陶器皿(第12図3)の底部片のみである。やや上げ底で内面に軸が付着しており、底部外面に回転糸切痕が残る。

本溝跡の時期は、第1号溝跡と同じく9世紀中葉から後半にかけての段階と思われる。

第3号溝跡 (第10図)

B・C-2・3グリッドに位置する。西側にほぼ等間隔で第1・2号溝跡が南北方向に併走し、東側は第4号柵列跡が隣接して位置する。南側では第4号溝跡と重複しており、本溝跡の方が新しい。

第1・2号溝跡と同じくほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは8.06m、幅は概ね0.6m前後を測る。確認面からの深さは北側が0.32m、南側が0.14m程を測り、第1・2号溝跡と逆に南から北へ下る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は深い北側で2層(15・16層)、浅い南側で1層(17層)確認され、第1・2号溝跡と同じくすべての層に火山灰と思われる白色粒を含んでいた。自然堆積と思われる。



第1～3号溝跡

土層説明 (AA' BB' CC')

- 1 灰黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒・炭化物少量含む。
- 2 にぶい黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒・炭化物少量含む。
- 3 にぶい黄褐色土：しまり・粘性弱，炭化物少量含む，後世ビッドか。
- 4 にぶい黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒多量，炭化物少量含む。
2層より明い。
- 5 にぶい黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒多量，炭化物少量含む。
4層より明い。
- 6 褐色土：しまり強，粘性弱，白色粒少量含む。
- 7 褐色土：しまり強，粘性弱，白色粒微量含む，6層より暗い。
- 8 暗褐色土・にぶい黄褐色土混合層：斑状に含む，白色粒多量含む。
後世掘り込みか？
- 9 褐色土：しまり強，粘性弱。
- 10 にぶい黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒（火山灰）多量含む。

- 11 にぶい黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒（火山灰）少量含む。
10層より暗い。
- 12 黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒（火山灰）少量含む。
- 13 褐色土：しまり強，粘性弱，黄褐色粒・白色粒（火山灰）少量含む。
- 14 にぶい黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒（火山灰）少量含む。
11層より暗い。
- 15 褐色土：しまり・粘性弱，白色粒（火山灰）少量含む。
- 16 褐色土：しまり強，粘性弱，白色粒（火山灰）微量含む，15層より暗い。
- 17 灰黄褐色土：しまり有，粘性弱，白色粒（火山灰）少量含む。
- 18 灰黄褐色土：しまり有，粘性弱，灰白色粒少量，白色粒（火山灰）微量含む。

第10図 永井太田北廓遺跡第1～3号溝跡

出土遺物（第12図）は、須恵器甕（4）、土師器坏（5）、甕（6・7）、土鍾（8）がある。

4は須恵器甕の底部。外面はタタキ目が残り、内面はナデ調整が施されている。産地不明。5は土師器坏。口縁部は内湾しながらほぼ直線的に立ち上がる。底部は平底に近い。調整は、口縁部外面及び内面は横ナデ、体部及び底部外面はヘラ削りである。内面に放射状暗文と螺旋状暗文が施文されている。第4号溝跡からの流れ込みと思われる。6は土師器甕の口縁部から胴上部までの部位。口縁部の開きが小さく、胴部が膨らむ。器形や法量から台付甕の可能性が高い。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部外面は横位のヘラ削り、内面はヘラナデである。7は土師器甕の底部。器壁が薄い。外面がヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。8は土鍾。やや大型で幅太である。所々欠損している。

本溝跡の時期は、第1・2号溝跡と同じく9世紀中葉から後半にかけての段階と思われる。

第4号溝跡（第11図）

C-2・3グリッドに位置する。南西部上位を第3号溝跡に切れ、南東部で第1号土坑を切っている。

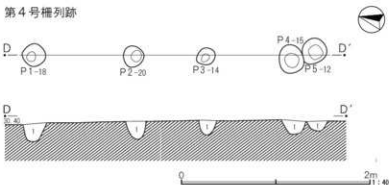
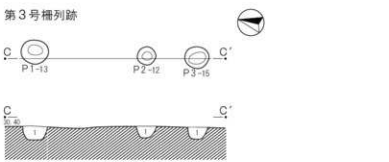
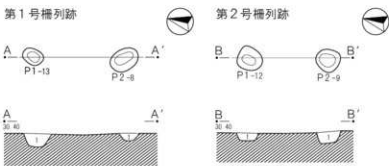
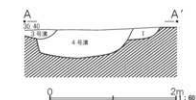
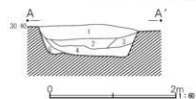
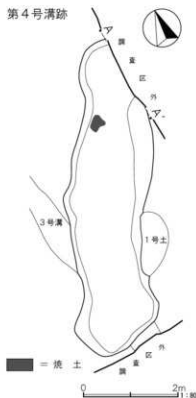
南西から北東方向へ走る。南西部は調査区前で終息し、北東部は調査区外へ延びる。検出された長さは6.04m、幅はバラツキがあるが、概ね1.6m前後を測る。確認面からの深さは0.5m前後を測る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は、5層（1～5層）確認された。このうち最下層の4層は焼土・炭化物層であり、北西部底面では焼土がまとまっているのが確認された。

出土遺物（第12・13図）は、須恵器坏（9～11）、高台付椀（12）、長頸瓶（13）、甕（14）、土師器坏（15～36）、甕（37～45）、台付甕（46・47）、甕（48）、平瓦（50）がある。出土位置を図示できなかったが、これらはすべて4層からの出土であり、主に焼土が確認された周辺からまとまって検出された。

9～14は須恵器。9～11は坏。11のみ口縁部を欠く。器高は4cm弱を測るが、10のみ口径と底径の比率が大きい。口縁部は9がやや内湾しながら、10は直線的に大きく開く。底部はすべてやや上げ底である。調整は、口縁部から体部まで内外面ともに回転ナデ、底部外面は9・10が全面回転ヘラ削り、11のみ回転糸切後に外周ヘラ削りが施されている。12は高台付椀の底部。底部外面に全面回転ヘラ削りが施されている。13は長頸瓶の口縁部片。外面に自然釉が付着している。14は甕の胴下部片。外面にタタキ目、内面にあて具痕が残る。産地は9・10が末野産、その他は不明である。

15～48は土師器。15～36は坏。15～20は内面に放射状暗文が施文され、15・16は螺旋状暗文も施文されている。暗文坏も含め、坏15～35は、口径16cm代、器高4cm程の大型のもの（17・18・22）、口径15cm前後、器高3cm程の中型のもの（21・23～26・30）、口径13cm前後、器高3cm程の小型のもの（15・16・27～29・31～35）に大別される。器形は口縁部が直立し、体部が内湾するものが多いが、口縁部がやや外反するもの（26）、口縁部から体部が内湾しながら立ち上がるもの（27）、口縁部が直線的に小さく開くもの（24・31・33）などもある。体部に明確な稜を持つもの（26・29・31・33）もみられた。底部は16のみ平底であるが、その他は平底に近い。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、体部から底部はヘラ削りであるが、体部に指オサエが施されたもの（21～28・30・31・33～35）も多数みられた。形状の異なる36は、口縁部を欠くが、器壁が厚く、底部はほぼ平底である。調整は外面が横位、内面は横・斜位のヘラミガキであり、内面は黒色処理が施されている。重複する第3号溝跡からの流れ込みと思われる。

37～45は甕。37～41は長胴甕。37は口縁部から胴下部まで、38～40は口縁部から胴上部までの部位、41は口縁部である。口縁部は「く」の字状を呈するが、37は外面に弱い稜を有する。比較的器形の



第4号溝跡
土層説明 (AA')
 1 褐色土：しまり強、粘性弱、焼土粒・炭化物微量含む。
 2 褐色土：しまり・粘性弱、焼土粒・炭化物多量含む。
 3 褐色土：しまり・粘性弱、焼土粒・炭化物少量含む。1層より埋い。
 4 焼土・炭化物層：褐色土（3層）ブロック状を含む。
 5 にぶい黄褐色土：しまり強、粘性弱、炭化物少量含む。

第1～4号標列跡
土層説明 (AA' BB' CC' DD')
 1 灰黄褐色土：しまり有、粘性弱、白色粒（火山灰）少量含む。

第1号土坑
土層説明 (AA')
 1 褐色土：しまり有、粘性弱、炭化物少量含む。

第11図 永井太田北廓遺跡第4号溝跡・第1～4号標列跡・第1号土坑

分かる37・38は胴部が膨らむが、口縁部と胴部の径にほとんど差がない。調整は、口縁部が内外面ともに回転ナデと指オサエ、胴部外面は上位が横位、下位は斜位のヘラ削り、内面はヘラナデである。40以外は口縁部外面に輪積痕が残る。42～44は丸胴甕。42は口縁部から胴上部まで、43は胴上部から下部にかけての部位、44は底部である。42は口縁部の開きが小さく、胴上部が大きく膨らむ。43は胴上部に

最大径を持つと思われる、下に向かってすぼまる。調整は、42の口縁部が内外面ともに回転ナデと指オサエ、ヘラによる刻み、胴上部外面は横位のヘラ削り、内面は斜位のヘラナデである。43は胴上部が横位、下部が斜位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデが施されている。内面下部に輪積痕が所々残る。44は外面が横・斜位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデである。45は甕の胴下部片と思われる破片。約半分の残存であるが、両面に焼成前に整形された縦方向の透孔のような箇所が認められた。調整は外面が縦位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデであり、内面は一部に輪積痕が認められた。46・47は台付甕の台部である。ともに「ハ」の字に開くが、46は裾付近外面に弱い稜を有する。内外面ともに回転ナデが施され、47は裾付近に輪積痕が残る。48は甕。底部を欠く。最大径を持つ口縁部は外反しながら開く。以下は下に向かって緩やかにすぼまる。調整は、口縁部が内外面ともに回転ナデ、胴上部外面は横位、以下は斜位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデである。下部に輪積痕が残る。49は平瓦の破片。両面ともに比較的丁寧なヘラミガキ調整が施されている。

本溝跡の時期は、8世紀中葉から後半にかけての段階と思われる。

(2) 柵列跡

第1号柵列跡(第11図)

A-2グリッドに位置する。東側に隣接して第1号溝跡がほぼ南北方向に走っており、南側は第2・3号柵列跡、西側は単独ピット(P1)が分布する。本柵列跡は第2・3号柵列跡を含め、同一遺構とみなした方が良いと思われる。

柱穴は2つのみであり、ほぼ南北方向に並ぶ。柱穴はいずれも楕円形を呈するが、径はP1が長径0.22m、短径0.16m、P2は長径0.31m、短径0.22mを測り、大小異なる。確認面からの深さは、P1が0.13m、P2が0.08mを測る。P1・2の柱間は0.9mを測る。いずれの柱穴からも覆土に柱痕跡は認められず、白色粒(火山灰)を含んだ灰黄褐色土のみである。

出土遺物はないが、本柵列跡の時期は第1～3号溝跡と同じく9世紀中葉から後半にかけての段階としておきたい。

第2号柵列跡(第11図)

A-2グリッドに位置する。第1号柵列跡と同じく東側に隣接して第1号溝跡がほぼ南北方向に走っており、西側は単独ピット(P2)が位置する。同一遺構と思われる第1号柵列跡が北側、第3号柵列跡が南側に分布する。

柱穴は2つのみであり、第1号柵列跡と同じくほぼ南北方向に並ぶ。柱穴は径0.25m前後のやや角張った円形状を呈する。確認面からの深さは、P1が0.12m、P2が0.09mを測る。P1・2の柱間は0.9mを測る。いずれの柱穴からも覆土に柱痕跡は認められず、第1号柵列跡と同じく白色粒(火山灰)を含んだ灰黄褐色土のみである。

出土遺物はないが、本柵列跡の時期は、第1～3号溝跡及び第1号柵列跡と同じく9世紀中葉から後半にかけての段階としておきたい。

第3号柵列跡(第11図)

B-3グリッドに位置する。第1・2号柵列跡と同じく東側に隣接して第1号溝跡がほぼ南北方向に

走っており、西側及び南側に単独ピット（P3～5）が3基分布する。同一遺構と思われる第1・2号柵列跡が北側に位置する。

柱穴は3つ確認され、第1・2号柵列跡と同じくほぼ南北方向に並ぶ。柱穴はいずれも円形を呈し、径はP1・3が0.25m前後、P2のみ0.19mと小さい。確認面からの深さは、0.12～0.15mを測る。柱間は不規則であり、P1・2間は1.2m、P2・3間は0.6mを測る。いずれの柱穴からも覆土に柱痕跡は認められず、他の柵列跡と同じく白色粒（火山灰）を含んだ灰黄褐色土のみである。

出土遺物はないが、本柵列跡の時期は、第1～3号溝跡及び第1・2号柵列跡と同じく9世紀中葉から後半にかけての段階としておきたい。

第4号柵列跡（第11図）

C-2グリッドに位置する。西側に隣接して第3号溝跡がほぼ南北方向に走っており、東側は単独ピット（P14～18）が複数分布する。

柱穴は5つ確認された。第1～3号柵列跡と同じくほぼ南北方向に並び、P4・5は隣接する。柱穴はいずれも円形を呈し、径はP3が0.18mと小さく、P4が0.3mと大きい。その他は概ね0.22m前後を測る。確認面からの深さは、0.12～0.2mを測る。柱間は不規則であり、P1・2間が1.1m、P2・3間が0.75m、P3とP4・5間が1m前後を測る。いずれの柱穴からも覆土に柱痕跡は認められず、他の柵列跡と同じく白色粒（火山灰）を含んだ灰黄褐色土のみである。

出土遺物に図示できるものはないが、P4・5から時期不明の土師器甕胴部の小片が検出されている。

本柵列跡の時期は、第1～3号溝跡及び第1～3号柵列跡と同じく9世紀中葉から後半にかけての段階としておきたい。

（3）土坑

第1号土坑（第11図）

C-3グリッドに位置する。西側大半を第4号溝跡に切られている。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は0.55m、南北は1.34mを測る。確認面からの深さは0.17mを測る。平面形は円形ないし楕円形を呈すると思われる。立ち上がりは概ね緩やかであり、底面は中央に向かってやや下る。覆土は炭化物を含む褐色土1層のみである。自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本土坑の時期は、第4号溝跡との新旧関係から8世紀中葉以前としか言えない。

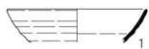
（4）ピット

ピットは計21基検出された。調査区ほぼ全面に分布するが、主に東、中央、西側の3か所に分けられる（第9図）。平面形が円形を呈するものは径0.2m前後、楕円形を呈するものは長径0.25m、短径0.2m前後を測る。確認面からの深さは0.15m前後のものが多い。

出土遺物で図示可能なものは、P14出土の陶器蓋（第13図50）のみである。つまみを含め外面に灰釉が施されている。図示しなかったが、底面に回転糸切り痕が残る。この他では図示不可能な遺物としてP5・11・12・14・18から古代の土師器甕の小片が検出されている。

ピットの時期は、P14以外、9世紀中葉から後半にかけてのものが多いと思われる。

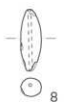
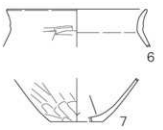
第1号溝跡



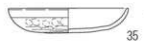
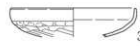
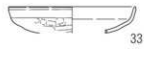
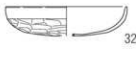
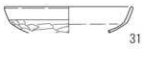
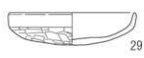
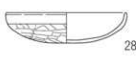
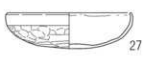
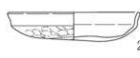
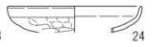
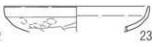
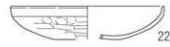
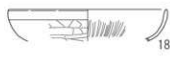
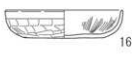
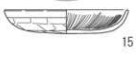
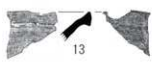
第3号溝跡



第2号溝跡

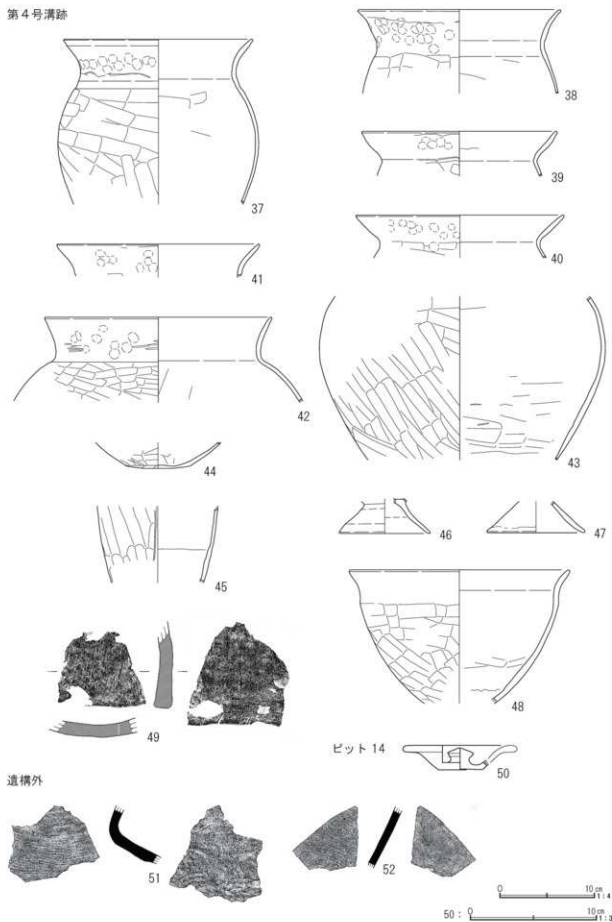


第4号溝跡



第12图 永井太田北廓遺跡出土遺物(1)

第4号溝跡



第13図 永井太田北廓遺跡出土遺物（2）

第3表 永井太田北原遺跡出土遺物観察表

出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1 第1号溝跡	須恵器高台輪	(14.8)	(3.55)	-	ABFN	灰色	B	口~体10%	南比企産。
2 第1号溝跡	刀子	最大長(4.4)cm, 最大幅(0.8)cm, 最大厚(0.6)cm, 重量(3.74)g.				灰白	B	口部のみ。	柄部のみ。
3 第2号溝跡	灰釉陶器 皿	-	(1.0)	(6.4)	AB	外:灰白 内:オリーブ灰	B	底部10%	内面灰釉付着。
4 第3号溝跡	須恵器 甕	-	(4.4)	(10.3)	ABN	灰色	B	底部15%	
5 第3号溝跡	土師器 杯	(13.2)	2.85	(9.4)	ABEH	明赤褐色	B	25%	内面放射状・螺旋状暗文有。
6 第3号溝跡	土師器台付甕	(14.9)	(4.1)	-	ABCGHKN	にぶい赤褐色	B	口~胴20%	
7 第3号溝跡	土師器 甕	-	(4.65)	(5.8)	ABEHKMN	にぶい赤褐色	B	底部20%	
8 第3号溝跡	土 鉢	最大長6.4cm, 最大径2.1cm, 孔径0.3cm, 重量 (24.3) g.							所々欠。
9 第4号溝跡	須恵器 杯	(13.3)	3.75	8.8	AB	黄灰色	B	50%	末野産。内面・口縁部外面自然釉付着。
10 第4号溝跡	須恵器 杯	(14.2)	3.65	(7.6)	ABFN	灰黄色	B	30%	末野産。
11 第4号溝跡	須恵器 杯	-	(2.6)	(8.7)	ABN	灰黄色	B	体~底40%	
12 第4号溝跡	須恵器高台輪	-	(1.25)	-	AB	黄灰色	B	底部60%	
13 第4号溝跡	須恵器長頸瓶	-	-	-	ABN	外:青黒 内:灰	B	口縁部片	外面自然釉付着。
14 第4号溝跡	須恵器 甕	-	-	-	ABN	黄灰色	B	胴下部片	
15 第4号溝跡	土師器 杯	(13.2)	2.5	9.5	ABEHK	明赤褐色	B	70%	内面放射状・螺旋状暗文有。
16 第4号溝跡	土師器 杯	(12.4)	2.95	(8.0)	ABEHKN	にぶい赤褐色	B	20%	内面放射状・螺旋状暗文有。
17 第4号溝跡	土師器 杯	(16.8)	(4.0)	-	ABGHK	にぶい赤褐色	B	30%	内面放射状暗文有。
18 第4号溝跡	土師器 杯	(16.8)	(3.3)	-	ABGHKN	にぶい赤褐色	B	10%	内面放射状暗文有。
19 第4号溝跡	土師器 杯	-	(1.4)	(9.6)	ABCHK	明赤褐色	B	底部20%	内面放射状暗文有。
20 第4号溝跡	土師器 杯	-	-	-	ABGHN	にぶい赤褐色	B	口縁部片	内面放射状暗文有。
21 第4号溝跡	土師器 杯	(14.9)	(3.1)	-	BCGHK	にぶい褐色	B	30%	
22 第4号溝跡	土師器 杯	(16.2)	3.5	-	ABGHKN	にぶい赤褐色	B	25%	
23 第4号溝跡	土師器 杯	(15.4)	(2.7)	-	ABDHKN	にぶい赤褐色	B	15%	
24 第4号溝跡	土師器 杯	(14.2)	(2.75)	-	ABEHKN	明赤褐色	B	15%	
25 第4号溝跡	土師器 杯	(14.7)	(3.2)	-	ABGHKN	明褐色	B	20%	
26 第4号溝跡	土師器 杯	(14.0)	3.05	-	ABCGHKN	明赤褐色	B	40%	
27 第4号溝跡	土師器 杯	(13.4)	3.8	-	ABHKN	にぶい赤褐色	B	60%	口縁部内面輪積痕有。
28 第4号溝跡	土師器 杯	(12.8)	3.2	-	ABGHK	にぶい赤褐色	B	25%	
29 第4号溝跡	土師器 杯	(13.6)	3.4	-	ABCGHK	にぶい赤褐色	B	45%	
30 第4号溝跡	土師器 杯	(14.2)	(2.65)	-	BDH	にぶい黄褐色	B	20%	
31 第4号溝跡	土師器 杯	(13.6)	(2.8)	-	ABK	褐色	B	25%	
32 第4号溝跡	土師器 杯	(12.8)	3.1	-	ABDGHKN	にぶい赤褐色	B	30%	
33 第4号溝跡	土師器 杯	(13.5)	(2.8)	-	ABDHKN	にぶい褐色	B	15%	
34 第4号溝跡	土師器 杯	13.1	(3.05)	-	ABDGHKN	にぶい赤褐色	B	40%	
35 第4号溝跡	土師器 杯	(12.8)	2.6	-	ABHK	明赤褐色	B	30%	
36 第4号溝跡	土師器 杯	-	(2.9)	(10.4)	ABHK	外:橙 内:黒	B	体~底25%	内面黒色処理。
37 第4号溝跡	土師器 甕	(20.0)	(17.4)	-	ABCGHKN	明赤褐色	B	口~胴30%	口縁部外面輪積痕有。
38 第4号溝跡	土師器 甕	(21.5)	(8.9)	-	ABDHK	にぶい褐色	B	口~胴60%	口縁部外面輪積痕有。
39 第4号溝跡	土師器 甕	(20.7)	(4.8)	-	ABHKN	にぶい褐色	B	口~胴20%	口縁部外面輪積痕有。
40 第4号溝跡	土師器 甕	(22.0)	(4.6)	-	ABCHK	にぶい褐色	B	口~胴15%	
41 第4号溝跡	土師器 甕	(21.4)	(3.55)	-	ABEHJK	にぶい赤褐色	B	口縁部15%	口縁部外面輪積痕有。
42 第4号溝跡	土師器 甕	(24.0)	(9.1)	-	ABCHK	にぶい赤褐色	B	口~胴20%	
43 第4号溝跡	土師器 甕	-	(17.2)	-	ABEHKN	明赤褐色	B	胴部50%	胴下部内面輪積痕有。
44 第4号溝跡	土師器 甕	-	(2.8)	(7.0)	ABHK	外:黒褐 内:にぶい黄橙	B	底部40%	
45 第4号溝跡	土師器 甕?	-	(8.2)	-	ABDGHK	にぶい褐色	B	胴下部50%	両面縦透孔?有。内面輪積痕有。
46 第4号溝跡	土師器台付甕	-	(3.7)	9.7	ABCHK	にぶい赤褐色	B	台部75%	
47 第4号溝跡	土師器台付甕	-	(3.3)	(10.4)	ABHK	にぶい赤褐色	B	台部30%	外面輪積痕有。
48 第4号溝跡	土師器 瓶	(23.4)	(14.25)	-	ABEGHN	にぶい赤褐色	B	口~胴20%	胴下部内面輪積痕有。
49 第4号溝跡	平瓦	最大長(9.2)cm, 最大幅(9.3)cm, 最大厚1.9cm.			胎土:ABDHN.	色調:黒色.			大平欠。
50 P14	陶器 蓋	-	-	-	-	-	-	つまみのみ	外面灰釉. 底面回転糸切痕残.
51 遺構外	須恵器 甕	-	-	-	ABL	灰色	A	頸~肩部片	末野産。
52 遺構外	須恵器 甕	-	-	-	ADL	オリーブ黒 青灰	B	胴下部片	末野産。内外面自然釉付着。

(5) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、須恵器甕の破片(第13図51・52)2点のみである。ともに末野産。51は頸部から肩部にかけての破片。頸部内外面は回転ナゲ調整、肩部外面はタタキ目、内面はあて具痕が残る。52は胴下部片。内外面ともに自然釉が付着し、ナゲ調整が施されているが、外面はタタキ目がやや残る。

3 調査のまとめ

永井太田北廓遺跡は、熊谷市北西部の永井太田字北廓に所在する遺跡である。遺跡は利根川から約1kmの距離にあり、利根川とその支流によって形成された微高地上に立地している。遺跡範囲内の大半は畑や水田が広がっており、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・須恵器が散布する状況から旧妻沼町の時に集落遺跡として埋蔵文化財包蔵地の周知化がなされている。なお本遺跡の名称は、今回の発掘調査及び報告書作成の段階まで「北廓遺跡」の名称であったが、同名の遺跡が熊谷市内（旧大里町）に存在することから報告書刊行を機に「永井太田北廓遺跡」と改めたものである。

永井太田北廓遺跡における発掘調査は、今回が初となる。検出された遺構は、溝跡、柵列跡、土坑、ピットであり、調査地点は遺跡範囲南端中央付近にあたることから、これらの遺構は集落を区画するものであったと考えられる。検出された溝跡4条のうち、第4号溝跡では下層から図示不可能なものも含め、多数の遺物が出土している。出土遺物は須恵器、土師器、瓦などがあり、特に土師器坏の破片が目立つが、完形品はなく、すべて欠損していたことから廃棄されたものと考えられる。

今回の調査では、堅穴住居跡などは確認されなかったが、集落の中心となる箇所は、調査地点北側約250mに位置する能護寺周辺の標高がやや高いことから、同寺周辺に広がっている可能性が高い。

別名「あじさい寺」として有名な能護寺は、狩野派の流れをくむ絵師たちが描いた「能護寺内陣格天井の絵画」や「十六羅漢図」、弘法大師空海が筆記した「般若心経」、江戸中期鋳造の「梵鐘」など複数の市指定文化財を所有する県内有数の名刹である。伝聞によると、能護寺は天平15年(745年)行基によって開山され、後に弘法大師によって再建されたとのことであるが、史実か定かではない。旧妻沼町にある寺院のうち、開山の年次が明確なのは本遺跡東約3kmにある歎喜院長楽寺以外にないが、「歎喜院は、能護寺末ということから、歎喜院長楽寺が建立された建久八年(1197)より古い寺である」(妻沼町1977)との見解もあることから、本遺跡には寺院の前身となる遺構、もしくは寺院に関連する遺構なども存在するかもしれない。また永井太田地区には、本遺跡南東約1kmに飯塚北遺跡や飯塚古墳群などが所在し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われた発掘調査では、縄文時代後期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代までの遺構・遺物が確認されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2005・2006)。特に奈良・平安時代は、堅穴住居跡約300軒、掘立柱建物跡約40棟と膨大な数の遺構が検出されており、大規模集落であったことが判明している。そして、一部の堅穴住居跡からは円面硯の圈足硯の破片や釵子、帯金具、石製丸軋などの帯金具一式が出土し、9世紀中葉～10世紀前半の土坑からは施釉陶器が多数出土していることから一般的な集落とは言えない規模・内容を持っている。

能護寺を含む永井太田北廓遺跡は、今回の調査が初となることから現時点ではその様相は不明と言わざるを得ないが、飯塚北遺跡の存在も含め、永井太田地区は今後注目しておくべき地域と言える。

引用・参考文献

- 財団埼玉埋蔵文化財調査事業団 2005 『飯塚北遺跡Ⅰ』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第306集
2005 『飯塚古墳群Ⅰ』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第317集
2006 『飯塚北Ⅱ/飯塚古墳群Ⅱ』 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第321集
妻沼町 1977 『妻沼町誌』 妻沼町誌編纂委員会

杉之道遺跡



IV 杉之道遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

平成23年8月、事業者より熊谷市弥藤吾字杉之道1907番1の土地について、個人専用住宅を目的とした開発事業計画による、埋蔵文化財有無の照会が教育委員会に提出された。照会地は、杉之道遺跡（県遺跡No.61-057）の南西側隣接地にあたり、遺跡の広がりが予想されたため、事業者の承諾をとり、平成23年9月13日に試掘調査を実施した。調査の結果、現地表下30cmで平安時代に属すると判断される溝跡が確認された。

その後、地盤調査が行われ、地耐力が不十分であるとの結果により、基礎工事に際し柱状改良を行うとの連絡があった。遺構の盛土保存が困難であることから、記録保存のための事前の発掘調査が必要であるとの判断に至った。

また、杉之道遺跡の広がりが確認されたことから、平成23年9月21日付け熊教社発第1435号で、遺跡範囲の変更増補を埼玉県教育委員会へ届出ている。

発掘調査に先立ち、埋蔵文化財発掘の届出が事業主より平成23年11月7日付けで提出され、埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成23年11月24日付け教生文第5-969号で発掘調査実施について指示通知があった。

発掘調査にかかる事務は、熊谷市教育委員会から「埋蔵文化財発掘調査の通知」（平成23年11月14日付熊教社発第1525号）を埼玉県教育委員会へ通知している。

調査費用については、平成23年度文化財関係国庫補助事業補助金の対象事業とし、国1/2、埼玉県1/4、熊谷市1/4の費用負担を行った。

(2) 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査は平成23年11月16日から同年12月1日まで行った。調査面積は約66.24㎡である。11月16日に重機による表土除去作業を開始し、11月19日より作業員による遺構発掘作業と遺構平面図を作成し、11月28日に作業員による調査を終了し、12月1日に重機による埋戻し作業を行い終了した。取り上げた埋蔵物は、平成23年12月13日付けで熊谷警察署へ発見届を、同年12月13日付けで埼玉県教育委員会へ埋蔵文化財保管証を提出した。

整理作業は、平成26年12月15日から平成27年3月25日まで実施した。

報告書は、遺物の洗浄、注記、遺物の接合、復元作業から行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始し、これらと並行して遺構の図面整理を行った。遺物の拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て、平成27年3月25日に刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成23年度

教育長	野原 晃
教育次長	藤原 清
社会教育課長	斉木 千春
社会教育課文化財保護・市史編纂担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦
主持	吉野 健
文化財保護係主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹

イ 整理・報告書作成事業

平成26年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護・市史編纂担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健
文化財保護係主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主査	小島 洋一
主任	蔵持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
発掘調査員	原野 真祐
報告書編集・執筆者	森田 安彦

2 検出された遺構と遺物

(1) 立地と調査履歴

杉之道遺跡は、妻沼低地上の芝川と福川に挟まれた標高28m前後の微高地上の福川左岸に位置し、東西350m、南北150mの範囲に広がっている（第14図）。本微高地の南端には、斉藤別当実盛（1111-1183）の末裔が建立したと伝えられる氷川神社が立地している。

妻沼地域は、利根川及び利根川の支流によって形成された自然堤防とその後背地からなる低地帯で、福川と奈良川の間形成された南側の微高地帯、芝川と福川の間形成された中部微高地帯、芝川と利根川の間形成された北側の微高地帯の3つに区分される。杉之道遺跡は、この中部微高地帯の一つに位置している。

遺跡の西側は備前渠用水路が東流してきているが、本微高地を避けるように急激に北側へ流路を変えている。この備前渠用水路は、慶長9年（1604）江戸幕府の命令により、関東代官頭伊奈備前守忠次（1550-1610）によって計画され、20数キロメートルにわたり水路を開削したもので、備前堀と名づけられた。当時は正確な地図も無く、水路を開削する場所を幾度も歩いて調査し、夜には提灯を使い、土地の高さを測り、水が流れることを確かめたりと伝えられている。現在は、本庄市山王堂地区で利根川より取水し、深谷市、熊谷市へ流れ、福川に合流し利根川へと流れている。現在、用水路には、一部護岸工事が行われているものの、未だ開削当時の面影を残す素掘りの区間が多い。総延長は約23kmを測り、利根川右岸一帯の約1,400haの水田へ用水を供給している。

また、本遺跡の東側の微高地上には、王子西遺跡が位置している。これまで、2次に渡る発掘調査が行われ、平安時代の集落跡が確認されている。溝跡からは鉄製の鍬が1点出土しており注目される（熊谷市王子西遺跡調査会2012、熊谷市教育委員会2013）。

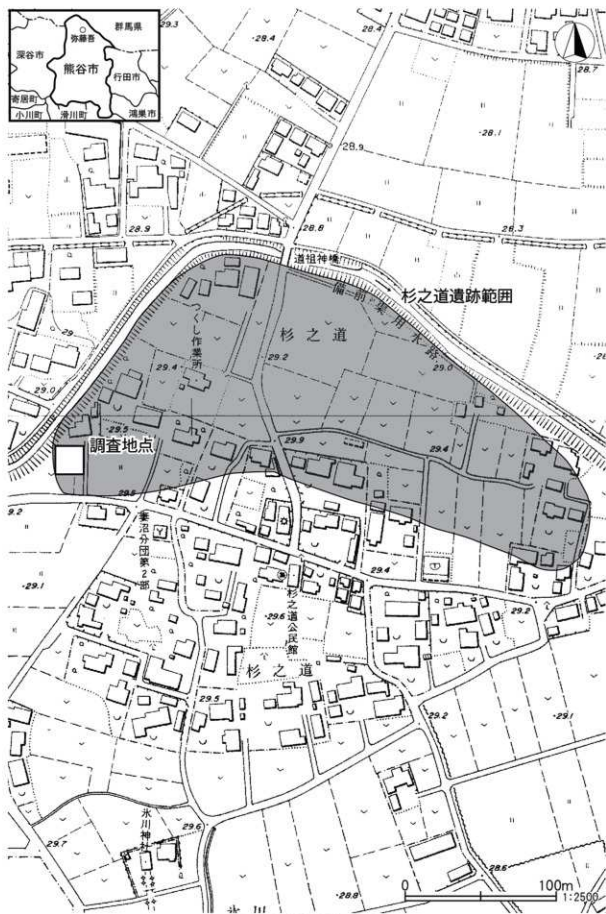
本遺跡は、これまで発掘調査が行われておらず、今回が初めての調査となる。遺跡内の試掘調査および工事立会いの結果では、古墳時代の遺構が確認され、須恵器・土師器が採取されていることから、古墳時代から平安時代にかけて営まれた集落跡であることが推測される。

(2) 検出された遺構と遺物

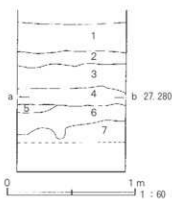
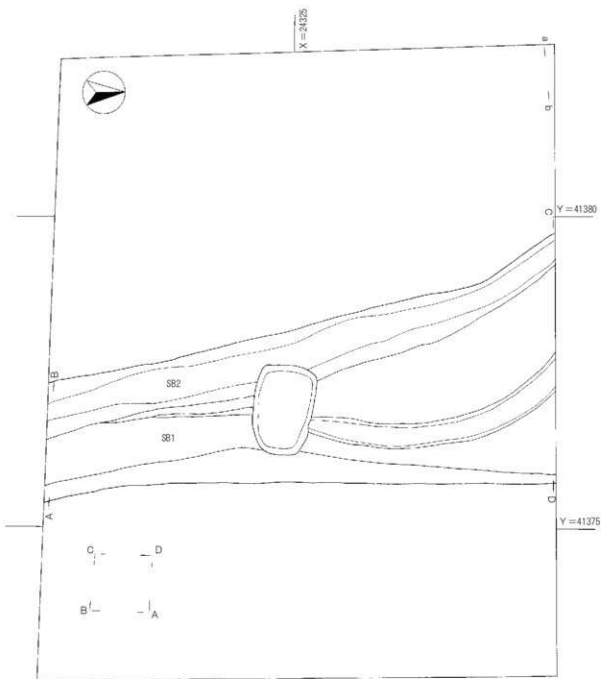
検出された遺構は、平安時代の溝跡2条である（第15図）。溝跡は、いずれも調査区外へと延びており規模・性格は不明である。出土遺物は少なく、溝跡から、平安時代に属する遺物が少量出土しているに過ぎない。

この他、地震に伴う液状化現象による噴砂の跡が、調査区南東部で確認されている。

本遺跡の基本土層は、調査区北西隅で深掘をして確認している（第15図、図版8）。第1層は耕作土で層厚21cm。第2層は明灰褐色土で、層厚11cm。第3層は明褐色土で、層厚18cm。平安時代の遺構確認面。第4層は、黒褐色土で、層厚13cm。第5層は明黄褐色土で、部分的に確認される再堆積したソフトローム層。第6層は、黄灰褐色砂質土で層厚15cm。第7層は、明黄灰褐色砂質土で、層厚15cm以上。第6層と第7層は、砂粒を多量に含んでおり、調査区南東隅では、当該層中に青灰褐色の純粋な砂層が存在し、液状化に伴う噴砂が確認されている。



第14図 杉之道遺跡調査地点位置図



基本土層

1. 灰褐色土 耕作土。
2. 明灰褐色土 しまり・粘性強、褐色スコリア少量、磁鉄鉱粒子多量、白色粒子微量含、粒子やや粗。
3. 明褐色土 しまり・粘性やや強、白色粒子微量、磁鉄鉱粒子多量含、粒子やや粗。
4. 黒褐色土 しまり・粘性やや強、砂質ローム粒ブロック状少量、磁鉄鉱粒子少量、粒子やや粗。
5. 明黄褐色土 しまり・粘性やや弱、ゾフトローム土、粒子やや粗。
6. 黄灰褐色砂質土 しまり・粘性やや弱、砂質ローム土、粒子細。
7. 明黄灰褐色砂質土 しまり・粘性やや弱、黄灰色の砂質粒子多含、粒子細。

第15図 杉之道遺跡調査区全測図・基本土層

(3) 溝跡

第1号溝跡(第15・16図、図版7・8)

【遺構】 調査区の中央、南北方向に延び、平行する第2号溝を切って構築されている。南北両端は調査区外に及んでおり、全体の規模は不明。長さは、調査区内で8.1m、上面幅は南端で1.6m、北端で3.0mを確認している。深さは南端部で31.1cm、北端部で31.9cmを測る。溝の断面は不整鍋底形を呈する。溝底の標高は、南端部で27.579m、北端で27.522mを測る。平均勾配0.7%で北側へ傾斜する。溝の中央部溝底に、長軸1.4m、短軸0.92m、深さ0.31mの長方形を呈する土坑が確認されており、この土坑から北へ幅0.32m、深さ0.09mの溝が延びている。覆土は、南端で第3・5～7層、北端で第6～9層が本溝の覆土であり、自然堆積を示す。

【遺物】 遺物は、主に覆土中・下層より出土している。1は、須恵器の長頸壺の胴部破片。胎土に黒色粒子と白色粒子を微量含む。2は、須恵器の壺の胴部破片。表面に自然軸が掛る。3は、須恵器の坏の胴部破片。胎土に砂粒を微量含む。5は、鉄製の鏝。一部欠損するが、推定長13.2cm、現存幅6.9cmを測る。断面は、2cmの方形を呈する。この他、図示できなかったが、緑釉陶器碗の小破片が1点出土している。

【時期】 3の坏は9世紀代に比定され、その他の遺物も平安時代に属するものと思われることから、本溝の時期も概ね9世紀代と判断される。

第2号溝跡(第15・16図、図版7・8)

【遺構】 調査区の中央、南北方向に延び、平行する第1号溝跡に切られている。南北両端は調査区外に及んでおり、全体の規模は不明。長さは、調査区内で8.1mを確認している。深さは南端部で46.9cm、北端部で53.5cmを測る。溝底の標高は、南端部で27.312m、北端で27.307mを測る。平均勾配0.1%で、僅かに北側へ傾斜する。

覆土は南端で第4層、北端で第3～5層が本溝の覆土であり、自然堆積を示す。

【遺物】 遺物は、覆土下層より1点のみ出土している。4は、須恵器の甕の胴部破片。胎土に、黒色粒子、白色粒子、長石を微量に含む。

【時期】 出土遺物から平安時代と判断される。

(4) 噴砂

調査区南東側において、利根川の乱流に起因すると推測される青灰色の砂層が、基本土層第6・7層中に存在しており、そこからの噴砂が、基本土層第3層上面まで噴き上がっていることが確認されている(第15・16図、図版8)。地震の液状化による噴砂と判断され、平安時代の遺構確認面である基本土層第3層まで確認されることから、イベント時期は平安時代に求められる。



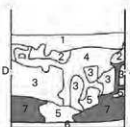
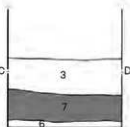
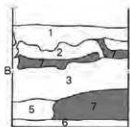
①第1・2号溝（南面）

1. 灰褐色土 耕作土。
2. 明灰褐色土 しまり・粘性強。褐色スコリア少量。磁鉄鉱粒子多、白色粒子微量含。粒子やや粗。
3. 明褐色土 しまり・粘性やや強。白色粒子微量。磁鉄鉱粒子多量含。粒子やや粗。
4. 暗褐色土 しまり・粘性やや強。砂質ローム粒少量。粒子やや粗。
5. 明褐色土 しまり・粘性やや強。白色粒子多。ローム粒子微量含。粒子やや粗。
6. 褐色土 しまり・粘性強。白色粒子・磁鉄鉱粒子微量含。粒子やや粗。
7. 暗灰褐色土 しまり・粘性強。砂質ローム微量含。粒子細。



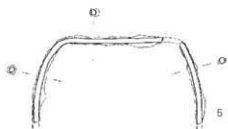
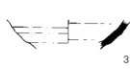
②第1・2号溝（北面）

1. 灰褐色土 耕作土。
2. 明灰褐色土 しまり・粘性強。褐色スコリア少。磁鉄鉱粒子多。白色粒子微量含。粒子やや粗。
3. 茶褐色土 しまり強・粘性弱。白色粒子少量。粒子細。
4. 暗茶褐色土 しまり強・粘性弱。下部にローム粒多含。粒子細。
5. 褐色土 しまり強・粘性やや強。ローム粒やや多含。粒子細。
6. 明茶褐色土 しまり強・粘性やや弱。白色粒子・褐色スコリア多含。粒子粗。
7. 褐色土 しまり強・粘性やや弱。ローム粒少量。粒子やや粗。
8. 茶褐色土 しまり強・粘性弱。ローム粒多含。粒子やや粗。
9. 黄褐色土 しまり強・粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。



噴砂

1. 茶褐色土 しまり・粘性やや強。磁鉄鉱少量含。粒子やや粗。
2. 暗黄褐色土 しまりやや強。粘性弱。砂質ローム土。粒子細。
3. 黄褐色土 しまり・粘性やや強。砂粒少量含。ソフトローム層。粒子細。
4. 暗黄褐色土 しまり・粘性弱。砂粒やや多含む。粒子細。
5. 灰黄褐色砂層 しまり・粘性弱。砂粒多含。粒子細。
6. シルト層
7. 砂層



0 10cm 1:3

第16図 杉之道遺跡溝跡・噴砂断面図・出土遺物

3 調査のまとめ

杉之道遺跡は、妻沼低地上の芝川と福川に形成された中部微高地帯に位置する。これまで、発掘調査が行われていなかったため、遺跡の性格は不明であったが、今回の調査で、平安時代の溝跡2条を確認することができた。鉄製の鋸や、緑釉陶器片が出土していることから、付近に該期の集落跡が存在していることが予想される。

また、遺跡内における付近の試掘調査や工事立会いの結果では、古墳時代の遺構を確認するとともに、該期の土師器や須恵器片が採取されていることから、本遺跡は古墳時代から平安時代にかけての集落跡であることが推測される。

本遺跡周辺の妻沼低地には、島状に残る微高地が多く点在しており、古墳時代より集落が営まれている。平安時代の大規模な拠点集落としては、鶴ノ森遺跡（埼玉県1984、妻沼町教育委員会2004、妻沼町遺跡調査会2005）や飯塚北遺跡（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2005・2006）が存在しており、集落跡としては、道ヶ谷戸遺跡（妻沼町教育委員会1981）、飯塚南遺跡（妻沼町教育委員会1981）、八幡木遺跡（妻沼町教育委員会1995）、王子西遺跡（王子西遺跡調査会2012、熊谷市教育委員会2013）、上江袋遺跡（埼玉県1984）が存在している。また、後背湿地を利用した生産遺跡として、道ヶ谷戸条里遺跡（妻沼町教育委員会1981）、山ヶ谷戸遺跡（熊谷市遺跡調査会2011）が存在している。

この他にも、妻沼地域の微高地には該期の遺跡が多く存在していることが推測されるが、発掘調査がほとんど行われていないことから、詳細は不明となっている。微高地上の集落とその後背湿地を利用した生産遺跡の関係については、今後、さらなる成果の集積により、詳細が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

- 王子西遺跡調査会 2012 『王子西遺跡Ⅱ』
- 熊谷市遺跡調査会 2011 『瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡』
- 熊谷市教育委員会 2013 『前中西遺跡 西別府館跡 王子西遺跡 立野遺跡』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 埼玉県 1984 『新編埼玉県史 資料編3』古代1 奈良・平安
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005 『飯塚北遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第306集
- 2006 『飯塚北Ⅱ/飯塚古墳群Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第321集
- 妻沼町遺跡調査会 2005 『鶴ノ森遺跡 2005年発掘調査の概要』
- 妻沼町教育委員会 1981 『妻沼西南遺跡群Ⅰ—道ヶ谷戸条里・道ヶ谷戸・飯塚南—』妻沼町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 1995 『沼ノ上・飯塚裏・藤屋敷・中原・八幡木』
- 2004 『鶴ノ森遺跡』

彦松西遺跡



V 彦松西遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経緯

平成25年8月14日付けで、事業者から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。開発の内容は面積262.47㎡の個人住宅1棟の建設であった。

熊谷市教育委員会は届出を受けて、平成25年9月2日に試掘調査を実施した。その結果、奈良時代から平安時代の土師器・須恵器片及び溝跡が検出され、埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を事業者に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、熊谷市教育委員会から、平成25年10月3日付熊教社第1447号で、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成25年10月10日から開始された。

なお、埼玉県教育委員会から、事業者あてに平成25年10月18日付教生文第4-859号で発掘調査実施の指示通知があった。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

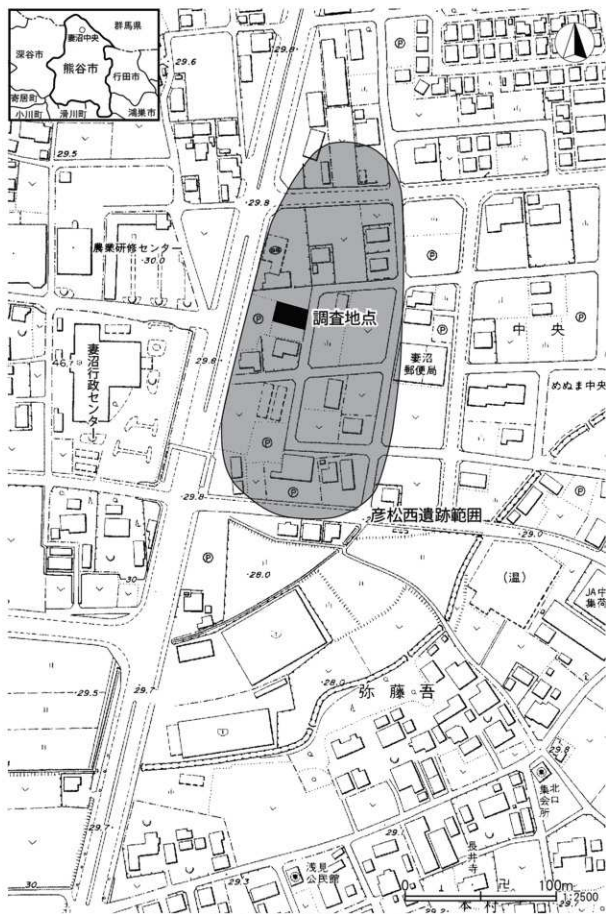
発掘調査は、平成25年10月10日から平成25年10月23日にかけて行われた。調査面積は、個人住宅建築面積63㎡であった。

平成25年10月10日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、10月11日から遺構精査作業を行った。その際、南北に延びる溝跡、いくつかのピットなどが確認され、順次遺構の調査に着手した。大部分の遺構は検出が比較的容易であったが、調査中の台風による降雨に伴い、壁面の崩落等の被害があり、復旧にいくらか時間を要したが、平成25年10月23日、調査のすべてを終了した。

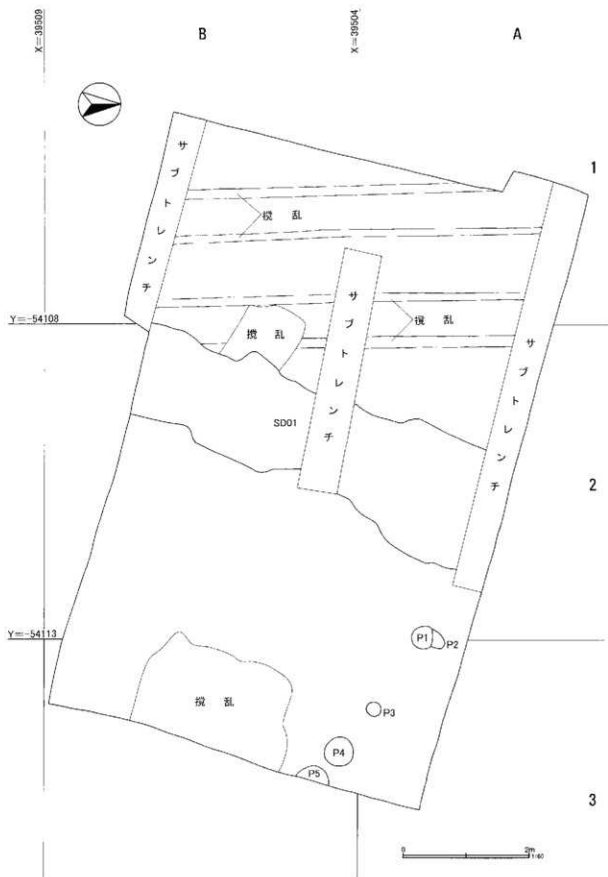
整理作業は、平成26年7月1日から始めた。遺物の洗浄・注記・復元を行った。10月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。11月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、1月中旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月25日に本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

発掘調査は平成25年度に、整理・報告書作成は平成26年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第II章石原古墳群・不二ノ腰遺跡と同一であるため記述を省略する。別途石原古墳群・不二ノ腰遺跡を参照されたい。



第17図 彦松西遺跡調査地点位置図



第18図 彦松西遺跡調査区全測図

2 検出された遺構と遺物

(1) 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、南東隅をA-1として北へA・B・・・、西へ1・2・3・・・とし、Aラインは東から西へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以南もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、分譲住宅建設予定地1か所の調査であり、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。表土剥ぎ後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は手掘りを行った。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

(2) 検出された遺構と遺物

(1) 溝跡

溝跡は、調査区の中央を横切る形で南北方向に検出された。なお、本溝を境に以西はすべて砂質堆積土であり、流路による堆積と思われる。

第1号溝跡 (第19図)

A-2・B-2グリッドから検出した。規模は、全長6.15m、幅1.28～2.00m、深さは0.62～0.65mであった。本溝跡は、全体的にほぼ同じ幅で南北方向に延びていた。

本溝跡は、土層断面から、おおむね西の方向から埋没していたことが推測できる。また、覆土の特に底部は砂質土であり、土層内の覆土からは多孔質の角閃石安山岩(2cm～10cm)が多数確認できた。

出土遺物(第20図)は、底面からは土師器杯、須恵器杯、磨石(敲石)などが検出された。それ以外に土師器、須恵器の細片が多く検出されたが、それらは図示可能な遺物ではなかった。

出土した遺物の多くは9世紀代であると考えられるが、本溝跡は利根川の旧流路としての跡として考えることができ、そのことを踏まえると遺物に関しても流れ込みの可能性が高いと思われる。

(2) ビット

ビットは、総じて5基検出した。ビットはA-2、3及びB-3グリッド内で検出され、それらは第1号ビット～第5号ビットまで確認できた。

ほぼすべてのビットが南東方向に向かって直線的に検出されたが、覆土等からその可能性はなく、またすべてのビットからは出土遺物は検出されていない。

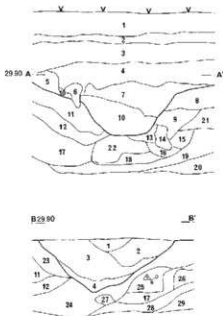
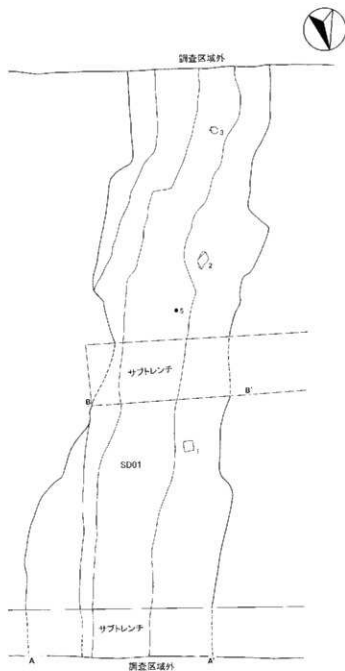
以下ビットごとに詳細を記載する。

第1号ビット (第21図)

A-2、3グリッドにまたがる形で検出した。第2号ビットと重複関係にあり、第2号ビットを切っていた。

平面プランは円形で、規模は長軸0.35m、短軸0.32m、深さ0.38mであった。

出土遺物は検出されなかった。



第1号溝跡(A-A') (B-B')

- 1 埋土
- 2 黄褐色土 2.5Y-5/1 (Fe₂O₃少量)
- 3 にごい黄褐色土 10YR-4/2 (一部黄土、火山灰少量)
- 4 灰褐色土 2.5Y-6/4 (火山灰少量、一部以(粘土))
- 5 黄褐色土 2.5Y-4/1 (火山灰粒子少量)
- 6 1に火山灰粒子、一部小小骨化
- 7 灰褐色土 2.5Y-6/2 (火山灰粒子少量)
- 8 灰黄褐色砂質土 10YR-4/2
- 9 暗灰褐色土 2.5Y-5/2 (火山灰粒子少量、多量黄褐色(火山灰)少量)
- 10 黄褐色土 10YR-2/2 (火山灰粒子少量、小骨少量)
- 11 にごい黄褐色土 10YR-5/3 (火山灰粒子少量)
- 12 4に以(粘土)多量に骨
- 13 灰黄褐色砂質土 10YR-5/2
- 14 灰黄褐色土 10YR-3/2 粒子種小
- 15 4に 16に似る
- 16 黄褐色砂質土 2.5Y-3/1 粒子種小
- 17 灰黄褐色砂質土 10YR-4/2
- 18 黄褐色土 7.5Y-4/1 (にごい黄褐色土 2.5Y-6/3 骨、Fe₂O₃多量)
- 19 暗褐色砂質土 10YR-5/1 粒子種小
- 20 灰色砂質土 5Y-4/1 粒子種小
- 21 黄褐色 10YR/1 (灰黄褐色 10YR/2 多量に混ざる、火山灰粒子少量、小骨、木骨少量)
- 22 土 10YR-2/1 (Fe₂O₃、多量黄褐色(火山灰)多量)
- 23 黄褐色土 2.5-3/2 (にごい黄褐色土 10YR-5/2 骨)
- 24 黄褐色土 2.5Y-5/1 (Fe₂O₃多量)
- 25 黄 7.5YR-2/1 (Fe₂O₃、多量黄褐色(火山灰)多量に混)
- 26 にごい黄褐色土 10YR-4/2
- 27 暗黄褐色土 7.5YR-5/1
- 28 暗黄褐色砂質土 2.5Y-4/2
- 29 28に黄褐色砂質土 2.5Y-3/1 骨

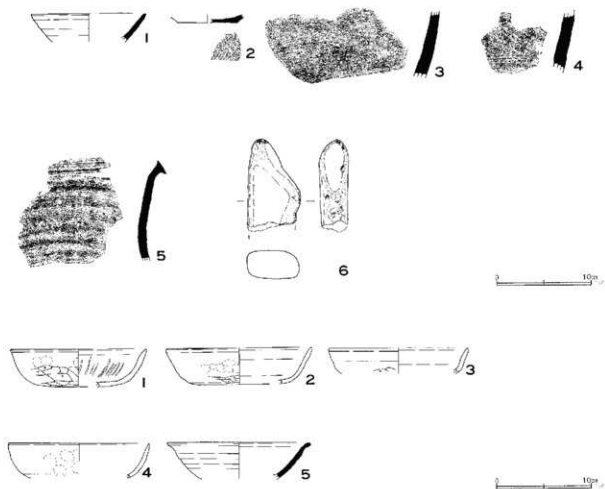
第2号ピット

- 1 灰褐色土 2.5Y-3/1 (少量火山灰粒子骨)
- 2 灰黄褐色土 10YR-4/2
- 3 にごい黄褐色土 10YR-6/4

第4号ピット

- 1 黄褐色土 7.5Y-3/1 (少量火山灰粒子骨、にごい黄褐色土 10YR-5/4 少量骨)
- 2 灰黄褐色土 10YR-4/2
- 3 にごい黄褐色土 10YR-4/2
- 4 黄褐色土 2.5Y-6/4
- 5 緑オリーブ色砂質土 2.5Y-3/2
- 6 暗黄褐色砂質土 2.5YR-4/2

第19図 彦松西遺跡第1号溝跡



第20図 彦松西遺跡第1号溝跡出土遺物(上)・表探遺物(下)

第4表 彦松西遺跡出土遺物観察表

遺構	番号	器種	法量 (cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
SD01	1	須恵器 杯	口径 (12.2) 残存高3.7	外面ナデ痕有	A、B、 L	黄灰2.5Y-5/1	良好	破片	南比企産
SD01	2	須恵器 杯	口径 (—) 残存高0.9 残存底径6.4	回転糸切痕有	I、K、L	灰N-5/	良好	底部片	末野産
SD01	3	須恵器 甕	—	外面ヘラケズリ痕有 指頭圧痕有	A、L	灰白5Y-8/1	良好	胴部片	末野産
SD01	4	須恵器 壺	—	外面ヘラケズリ痕有 内面加工なし	A、B、L、 H、L	灰白5Y-7/1	良好	胴部片	南比企産
SD01	5	須恵器 甕	—	外面ナデ痕有	A、B、 L	外面：N-4/ 内面：10YR-5/1	良好	口縁部片	南比企産
SD01	6	すり石	—	最大径 (9.8) 最大幅5.6 最大厚2.9	—	—	—	—	—
表探	1	土師器 杯	口径 (14.5) 残存高4.5	内面放射線状に暗文 口縁部指頭圧痕	A、B、I、 K、M	橙2.5YR-6/6	普通	20%	—
表探	2	土師器 杯	口径 (15.6) 残存高3.8	底部ヘラケズリ痕有 指頭圧痕	A、B、G、 H、K	橙5YR-6/6	普通	10%	—
表探	3	土師器 杯	口径 (12.4) 残存高2.7	—	A、B、H、 I、K、O	橙5YR-6/6	普通	口縁部の20%	—
表探	4	土師器 杯	口径 (12.0) 残存高3.7	外面指頭圧痕有	A、B、C、 E、M	橙2.5YR-6/8	普通	10%	—
表探	5	須恵器 (高台付) 椀	口径 (15.2) 器高3.9	—	A、B、D、 I、M、N	灰7.5Y-5/1	普通	口縁部の10%	—

3 調査のまとめ

本調査において特徴的だったのは、第1号溝跡やその周辺から検出された多孔質の角閃石安山岩といえる。これは6世紀代の榛名山の火山活動による転石であることが确实だと想定でき、その火山活動を経て、第1号溝跡がその転石を運んできた利根川の旧流路跡だともやはり想定することができるであろう。

この多孔質角閃石安山岩は特に利根川流域周辺にまたがって確認でき、古墳時代はその多くが古墳の石室等への石材として利用されていた。市内でも妻沼地域での王子古墳や熊谷地域の肥塚、中条古墳群でもこの石材を用いている古墳が存在している。

これらの利用分布や遺跡からの検出により、過去の利根川流域がどの程度であったかの影響を確認する貴重な情報源となることから、本調査も一様の成果があったと思われる。

引用・参考文献

- 秋池 武 2000『利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義』一棧名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石―「群馬県立歴史博物館紀要 第21号」
- 熊谷市 1963『熊谷市史』前編
- 熊谷市王子西遺跡調査会 2012『王子西遺跡Ⅱ』
- 熊谷市教育委員会 2011 熊谷市史研究 第3号「荒川の流路と遺跡―荒川新扇状地の形成と流路の変遷―」
- 熊谷市教育委員会 2013『前中西遺跡 西別府館跡 王子西遺跡 立野遺跡』―市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ―
- 栗原文藏・田部井功 1976『弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡発掘調査報告書第29集
- 寺社下博・金子正之 1983「熊谷市大塚古墳の第1次調査」第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 妻沼町 1977『妻沼町誌』「王子古墳発掘調査」
- 妻沼町誌編纂委員会 1977『妻沼町誌』妻沼町役場
- 妻沼町教育委員会 1982『大我井遺跡』
- 妻沼町教育委員会 1995『沼ノ上・飯塚裏・藤屋敷・中原・八幡木』

写 真 图 版



石原古墳群・不二ノ腰遺跡調査区全景（南から）



石原古墳群・不二ノ腰遺跡
第2号溝跡（西から）



石原古墳群・不二ノ腰遺跡
第1号溝跡礎堆積状況（西から）



石原古墳群・不二ノ腰道跡
第2号土坑確認状況（北から）



石原古墳群・不二ノ腰道跡
第1・2号土坑（西から）



石原古墳群・不二ノ腰道跡作業風景



永井太田北廓遺跡調査区全景（南から）



永井太田北廓遺跡調査区全景（南東から）

図版 4



永井太田北廓遺跡第1号溝跡



永井太田北廓遺跡第4号溝跡焼土検出状況



永井太田北廓遺跡第2号溝跡



永井太田北廓遺跡第1～3号柵列跡



永井太田北廓遺跡第3号溝跡



永井太田北廓遺跡第4号柵列跡



永井太田北廓遺跡第4号溝跡



永井太田北廓遺跡第1号土坑



永井太田北廓遺跡第3号溝跡 第12図5内面



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図16内面



永井太田北廓遺跡第3号溝跡 第12図5



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図16



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図9



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図27



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図15内面



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図29



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図32



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図15



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第12図34

图版 6



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图37



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图45



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图38



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图48



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图42



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图49



永井太田北廓遺跡第4号溝跡 第13图43



第1号溝跡 第12图2



第3号溝跡 第12图8



彦松西遺跡・杉之道遺跡航空写真（平成16年5月撮影）



杉之道遺跡第1・2号溝跡（南より）



杉之道遺跡基本土層



杉之道遺跡噴砂(北面)



杉之道遺跡噴砂確認狀況



杉之道遺跡噴砂確認坑



杉之道遺跡噴砂(南面)



杉之道遺跡噴砂(北面)



杉之道遺跡第1・2号溝跡出土遺物



杉之道遺跡第1号溝跡出土遺物



彦松西遺跡調査区全景 (東から)



彦松西遺跡第1号溝跡 (北から)



彦松西遺跡ピット全景 (西から)



彦松西遺跡第1号溝跡A A' (南から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いしはらこふんでんまふ・ふじのこしいせきさん ながいのけいたきたてゐのいせき すまのどういせき ひこまつにしいせき						
書名	石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ 永井太田北廓遺跡 杉之道遺跡 彦松西遺跡						
副書名	市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ						
巻次	—						
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第18集						
編集者名	腰塚博隆 松田 哲 森田安彦						
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会						
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111						
発行年月日	西暦2015(平成27)年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東緯 (°'〃)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いしはらこふんでんまふ・不二ノ腰遺跡	くまがやしひろせあぶふじのこしいせき 熊谷市広瀬字不二ノ腰 108番1	11202	59-025 59-102	36° 09' 08〃	139° 21' 16〃	20130708 ～ 20130723	21.20 個人住宅
ながいのけいたきたてゐのいせき 永井太田北廓遺跡	くまがやしながいのけいたきたてゐのいせき 熊谷市永井太田字北廓 1201番4	11202	61-044	36° 13' 43〃	139° 20' 23〃	20130930 ～ 20131011	79.00 個人住宅
すまのどういせき 杉之道遺跡	くまがやしやとうごあぶすまのどういせき 熊谷市弥藤字杉之道 1907番1	11202	61-057	36° 13' 06〃	139° 22' 23〃	20111116 ～ 20111201	66.24 個人住宅
ひこまつにしいせき 彦松西遺跡	くまがやしひこまつにしいせき 熊谷市妻沼中央7-11	11202	61-062	36° 13' 26〃	139° 22' 10〃	20131010 ～ 20131023	63.00 個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石原古墳群・不二ノ腰遺跡	集落・古墳	平安時代	溝跡 2 土坑 2	土師器・須恵器			
永井太田北廓遺跡	集落	奈良・平安時代	溝跡 4 欄列跡 4 土坑 1 ピット 21	土師器・須恵器・ 灰釉陶器・平瓦 陶器・土製品・ 鉄製品	奈良時代の溝跡から暗文坏をはじめ、遺物が多数出土。		
杉之道遺跡	集落	古代	溝跡 2	須恵器・鉄製錠	平安時代と推測される噴砂を確認		
彦松西遺跡	流路跡	古代	溝跡 1 ピット 5	土師器・須恵器・ 石製品	利根川の旧流路跡と思われる溝跡を確認		

本報告書は、編集を担当課で行い、印刷は外注により300部作成し、
1部あたりの単価は1,404円です。

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第18集

石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ 永井太田北廓遺跡 杉之道遺跡 彦松西遺跡

平成27年3月25日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷株式会社